



ともに歩んで
55周年

社会福祉法人となつて
35周年

座談会とインタビュー

語りで綴る「うらやす社協の歩みと展望」

社会福祉法人浦安市社会福祉協議会記念誌

ともに歩んで
55周年
社会福祉法人となつて
35周年

座談会とインタビュー

語りで綴る「うらやす社協の歩みと展望」

社会福祉法人浦安市社会福祉協議会記念誌

巻頭言◎皆さんとともに、これまでの軌跡も、これからの未来も

6

住みよい浦安のために 社協の役割と未来を語る

【対談】 内田悦嗣 浦安市長 × 浦安市社会福祉協議会会長 大塚久美子

8

女性の力が作り上げた浦安の福祉の礎

婦人の会はあらゆる活動の担い手だった

【座談会&インタビュー】 浦安の福祉の礎を担った「婦人の会」の先達が語る草創の頃

14

浦安の歴史とともに生き、ボランティア活動や地域

福祉に尽力。半生を振り返り「満足だねえ」と語る

【インタビュー】 ボランティアの達人・西脇いねさんに聞く

28

ボランティア活動の輪を大きく広げ、専門グループ化
やがて今日の「ボラ連」へとつなげる

【座談会】「浦安ボランティア会」と「手話サークル青べか」の草創期メンバーが語る歩みと展望

36

民生委員・児童委員、保護司として地域福祉に尽力
時代の変遷に柔軟に対応し、今も活動

【インタビュー】社協評議員や理事も務めた税所とみ子さん・折本幸子さんに聞く

46

地域密着のたすけあい活動、それは今日の地域包括
ケアシステムの活動のさきがけとしての意義も

【座談会】「さくらネットワーク」のメンバーが約10年間続けた活動を語る

52

推されて自治会活動や支部社協活動へ

今も柔軟な思考と行動力で地域福祉に取り組む

【インタビュー】多方面で活動してきた民生委員児童委員協議会会長、渡邊武さんに聞く

62

歴代会長あいさつ

社協に育てられて

梅原祥子

浦安社協の転換点に身を置いて

宇田川敬之助

地域福祉に触れて

宇田川精一

支部社協から【寄稿】

地域福祉を伝える

東1支部

安全で安心して住み続けられるように

東2支部

共に協議を重ねながら

西1支部

みなさんの協力で3本柱の目標を実現

西2支部

「ふれあい、わかちあい、支えあい」

南1支部

「17年間の取り組み」

南2支部

皆様と力を合わせ互いに支えあいながら

南3支部

ボッチャの普及を通して

北1支部

地域共生社会の実現に向け

北2支部

地域に根付き、交流を深め、地域力を支えます

海浜1支部

一人ひとりが責任感を持って

海浜2支部

79 78 78 77 77 76 76 75 75 74 74 72 70 68

写真と「社協だより」で振り返るうらやす社協の歩み

年 表

84 80

社協職員（平成29年度）

巻頭言 皆さんとともに、これまでの軌跡も、これからの未来も

遡ること今から55年前の昭和37年（1962）9月、浦安町社会福祉協議会は誕生しました。

日本が、戦後の混乱期を経て昭和29年（1954）に始まる高度経済成長の真ただ中であってモノの豊かさを追い求めていた時期でありながら、一方では、経済一辺倒への反省から心の豊かさや環境問題への関心が高まり始めた時期でもありました。

その頃の日本および浦安の出来事を追ってみると、「転換期」の文字が浮かび上がってきます。『環境立法』の第一歩ともいうべき「公共用水域の水質の保全に関する法律」と「工場排水等の規則に関する法律」（旧水質二法）が公布されたのが昭和33年（1958）12月のこと。これは、同年6月に浦安で起きたいわゆる「黒い水事件」が契機となったものです。社協創立と同じ昭和37年、浦安では漁業権の一部を放棄、同39年（1964）、日本では東海道新幹線が開業し、東京オリンピックが開催され、浦安では公有水面埋め立て事業が開始しています。そうした「転換期」のなか、浦安町役場庁舎の福祉課の一隅で私たちちうらやす社協の歩みは始まったのです。社協設立当時は、婦人の会の皆さんと民生委員の皆さんが中心となり、募金活動をはじめ、現在の社協事業の礎となる地域福祉活動が広まっていきました。

創立から19年を経た昭和56年（1981）浦安市市制施行、そして翌57年（1982）7月に社会福祉法人浦安市社会福祉協議会として認可、「うらやす社協だより」創刊、同63年（1988）4月には浦安市総合福祉センターの開設に伴い同センターへ移転、今日につながるさまざまな事業の事務局となるほか委託業務も開始——と、うらやす社協は歴史を刻んでまいりました。

この間、創立10周年や30周年という節目を迎えながら記念誌を編さんすることはありませんでした。そして創立50周年・法人化30周年という大きな節目を翌年に控えた平成23年（2011）、浦安市は東日本大震災により広範囲で液状化が発生し、甚大な被害に襲われました。うらやす社協が災害ボランティアセンターとなり、課題は残ったものの市内外から参集してくださったたくさんの方ボランティアの皆さんや支部社協の皆さんとともに復旧・復興に取り組んでまいりました。そしてあつという間に5年の月日が経ち、社協は創立55周年・法人化35周年を迎えることになりました。

うらやす社協の歩みを叙するにあたって、軌跡を留めた文書、あるいは年表の1行1行の行間に、関わってこられた方々の日々の活動があり、その活動の源泉ともいえるべき「心」があります。そこで本記念誌では、多くの皆様のご協力のもと、座談会やインタビューを行い、今日の社協事業の礎を築いてこられた方々の「語り」と写真をもって社協の歩みを綴っていくことにいたしました。

住みよい浦安のために 社協の役割と未来を語る

【対談】内田悦嗣 浦安市長 × 浦安市社会福祉協議会会長 大塚久美子

脈々と流れる浦安の助け合いの精神

内田市長 社会福祉協議会設立55周年おめでとうございます。また、法人化35周年おめでとうございます。

大塚会長 ありがとうございます。浦安市社会福祉協議会初めての記念誌編集に取り組んでいます。うらやす社協の歴史は、人々の真心が作ってきた歴史でもあります。今日の社協事業の礎を築いてくれた方々の記録をまとめ、地域福祉の要となって活動された方々に往時の事業背景や苦労話などを語っていただき、その歴史を記録し、永く後世に残していきたい。そうすることで地域福祉の脈々とした時の流れを次世代に伝え、今後の活動の糧にしたいと思っています。本来なら設立50周年の節目に発行するべきだったのですが、東日本大震災が起こり、浦安は広範囲に

わたる深刻な液状化現象に見舞われ、記念誌を発行できるような状況ではありませんでした。たくさんの方のお力添えで、未来への明確な展望が持てるようになってきたと思います。

加速する少子高齢化社会において、今後ますます社協は重要な役割を担っていくことになります。そのため市とのいっそうの連携、協働が重要になってきます。内田市長には、市のトップの視点からみた今後の社協の在り方、浦安のまちづくりにおける社協の役割・位置づけなど、また浦安生まれ浦安育ちの市長に、子どもの頃の浦安の様子などをお聞かせ願えればと思います。さっそくですが私が「ひまわり会」（母子寡婦福祉会）の会合に初めて出たときに「白菊会」の話が出ました。「白菊会」は「ひまわり会」の前身で戦争未亡人の会と伺っています。たしか市長のおば



あ様は「白菊会」に入られていたとお聞きしましたが。

内田市長 祖母は戦争未亡人でして、「白菊会」に入っていました。私が小さい頃、幼稚園にいますとおばあちゃんが来て「お母さんありがとう」というカーネーションを配っていたことを鮮明に覚えています。当時は、女性が一人で生活していくための働く場がなく、年金の集金など役場関連の仕事を「白菊会」の人たちがしていましたね。町役場が寡婦のセーフティネットの役割も果たしていたように思います。

大塚会長 困った人があれば直ぐ駆けつける。だれもがみんな一緒になって取り組む。そのように浦安はもともと人の絆が強い土地柄です。市長は堀江の旧家のお生まれですが、やはり隣近所がみんなで助け合うのを見て育ってききましたか。

内田市長 そうですね。近所や自治会の班で集まって、家で新年会をしていましたからね。

大塚会長 新年会なんて、昔はほとんどなかったでしょうね。1年に1回の近所のお祝い会ですよ。

内田市長 あとは、税金を払うための日掛貯金の箱を近所に回していましたね。そういう近所の絆っていうのか、連帯っていうのが、ありましたよね。浦安は近所を大事にしますからね。

地域福祉の担い手の高齢化問題

大塚会長 時代が変わり、人口も増えて、その浦安伝統の人情を、今の浦安市を見たとき、どう感じられますか。

内田市長 昔から浦安にある相互扶助の精神は今も受け継がれていると思います。なぜなら社協が中心となっていていろいろな事業を展開され、市民の皆さんといっしょに行政で手が届かないところにきちんと手を届けていただいていると思いますし、市民の皆さんが自発的にボランティアとして活動されていますから。ただ少しね、各組織が高齢化してきていますよね。

大塚会長 確かにそうですね。ここへ来る途中、市庁舎の下で、福祉バス「きずな号」から大勢の方が降りてくるのに遭遇したんですが、議場見学に来ている高齢者の方々とお連れしているボランティアの方々でした。確かにそのボランティアの皆さんも年配の方が多く、65歳の私が入るとたぶん一番若いくらい。

内田市長 65歳が若手という現状がある。ただね、今働き方改革だとかいろいろ言われている中で、現役世代が地域で活動できるようにいった悠長な、緩やかな時代ではないっていうことは確かです。だから定年になって65歳過ぎて地域に戻ってくるのがひとつの形なのかな。

大塚会長 たしかに時代もありますね。ただ、高齢化はすごく大きな問題だと思っています。

内田市長 若い人はPTAだとか子ども会、育成会、お祭りなど、いろいろなもので繋がっているのですが、地域の中で繋がるということが少しずつ希薄になってきているのは感じますね。

大塚会長 それが社協でも一番大事なこれからの課題です。

社会福祉協議会の役割と在り方

内田市長 社協は社会福祉法人であって、純粋な民間ではない点に注目しています。都市社会学者の磯村英一先生が、自宅が第1の場所で、第2の場所が会社や学校、『まち』は第3の空間であるべきで、第3の空間の充実がすなわち『まち』の活性化だと言われていました。浦安のまちづくりの三つ目の存在を社協に担ってほしいですね。行政が一つ目で、民間が二つ目、それを繋ぐ「サードパーティーの役割」が非常に重要になります。行政がいて市民だと、そこに対峙などいろいろなものが生まれることもある。社協が入ることです3者が上手く回っていく。そんな第3の存在として、社協にとっても期待しています。

大塚会長 そうおっしゃっていただけるととても嬉しいです。



内田悦嗣 浦安市長



社協会長 大塚久美子

内田市長 社協には、中核ではなく第3の存在として、その周辺のを全部整理して吸収してもらいたい。例えるなら、幼稚園の先生です。子どもたちと遠足に行くと、「そっち行ったらダメだよ。こっち入って。危ないよ」って整理する、そういう役割が社協の中にあると思うのですよね。
大塚会長 第3の存在。すぐく的を射た表現ですね。それ、これから使わせてもらおうかな（笑）。

内田市長 困っている、いないに関係なく、市民と行政のあいだにいつも寄り添っているのが社協であってほしい。普段は意識しないがいつもそこにいる。何かあったとき、ああ社協があつて良かった、社協がこんなことをやってくれ

ている」と分かる存在でいるのがベストだと思いますね。
大塚会長 意識しなくてもいいところですか。家族といっしょですね。

内田市長 そう、空気みたいな存在。行政も空気みたいな存在であるべきだと思います。でも、なかったら大変なことになる。

大塚会長 ただ、社協の存在を知っていただくことは必要かなと思います。社会福祉協議会はその名称を含め、何をしているところが分かりづらく、市民への浸透がなかなかできていないと常々思っていますので。啓発の思いも込めてこれまでいろいろな事業を立ち上げてきたので、今年はそれをさらに訴求していきたいとも考えています。

2000人のボランティアの力がつくる未来

大塚会長 支部社協を支えるボランティアが、推進委員と民生委員・児童委員を含めると、現在約2000人います。2000人が市民の皆さんの安心な暮らしのために生きがいを持って活動しています。

内田市長 自分が楽しくてやる、ことがボランティアの大原則だと私は考えます。それが結果的に人の役に立つことで喜びが生まれるので、その楽しさをもっと楽しめるような、そんな活動の下支えを社協にしていただければいい

のかなと思います。

大塚会長 生きがいを持って動く2000人を、ある時は下支えし、ある時はよりよい活動ができるようにきちんと啓発し、整理するということですね。

内田市長 社協には、地域のリーダーでありながら下支えする立場でもいてもらいたいと願います。各ボランティア団体などを取りまとめもし、団体の活動の下支えもするよ
うな。上に行ったり下に行ったり、忙しいのが社協の在り
方かなと。

大塚会長 分かりました。

内田市長 あとね、いつまでも社協には変わらないでいてほしいですね。継続は力なり。これまで担ってこられた先人の活動の賜物で、例えば、〃社協と言えば赤い羽根〃と定着しているのだから。そういった伝統的なものが後退するようなことはしないでもらいたい。活動の原点を継続して
いってもらいたい。

大塚会長 時代の福祉ニーズに合わせて社協の仕事を拡大してきましたが、言うまでもないことです、皆さんの力で定着してきた社協精神を継いでいく活動はしっかりと伝えていくことの重要性を改めて感じています。

内田市長 それと、要らないものは捨てた方がいいですね。状況に合わないものは辞める選択肢も視野に入れることが

必要でしょう。

大塚会長 同感です。市も継続と刷新のスローガンのもとに事業の整理を行っていると同っています。非常にエネルギーのいることですが、その視点を持って取り組んでいきます。

内田市長 社協のすごいところはなんだったってことでしょう。法律のしびりがなくて、活動を自分たちで決められるのが一番難しいところ。そういう点では、行政よりも難しいのかなって気はしますよね。だけど、だからこそやりがいのある、いてもらってありがたいと思われる組織体
なかなって。

大塚会長 今の世の中、福祉への注目がこれまでにないほど高まっています。実際に、認知症の高齢の方が増えてい
る。障がいのある方がいる。孤立する子育て世代がいる。その中でどのような状況にしようと地域で安心して暮らせる、そう考えるために、社協の存在は本当に大きいと思います。今日、市長から伺ったお話しは、支え支えられて
〃当たり前のことを普通に自然にやっていく〃という、私たちの活動の底辺を流れている話だと思っています。責任を感じつつも、気持ちが軽くなった気がします。

内田市長 最後に一つお願いがあります。浦安はこれまでどちらかというと近隣自治体とのお付き合いを重視してこ

なかったと思われます。これからは、「都市間競争」ではなく「都市間協調」です。ぜひとも社協も、東京の江戸川の方、市川市、船橋市など近隣の地域の方々と、いいものを浦安に導入するために交流、連携していただきたい。最後に要望として言わせていただきます。

大塚会長 我々も頑張りますので、ご協力をいただければと思います。本日は大変ありがとうございました。

※浦安母子寡婦福祉会「白菊会」

「昭和31年5月、第2次世界大戦の戦争未亡人60人により、心のよりどころと生活の安定を求めて浦安未亡人会（通称、

白菊会）が結成された。その後、会員の老齢化にともない会の運営も困難になったが、母子福祉推進協議会の協力を得て、108人の若い母子家庭の母たちが集まり、57年4月、浦安母子寡婦福祉会（通称、ひまわり会）を発足させた。同会は、会員相互の親睦と明るい希望のある生活の安定と向上を図り、あわせて地域社会の福祉増進に役立つことを目的に、会員相互生活援護事業、児童育成事業、各種教養・レクリエーション事業等を行っている。会員数は、平成8年3月末現在578人である。」（『浦安市史 生活編』1999年3月発行より）

なお、平成28年7月から会の名称を「浦安ひとり親家庭福祉会」に改め、現在に至っています。



女性の力が作り上げた浦安の福祉の礎 婦人の会はあらゆる活動の担い手だった

【座談会&インタビュー】浦安の福祉の礎を担った「婦人の会」の先達が語る草創の頃

社協事業の礎を築かれた方々のうち、最も古い時代を知るであろう「浦安婦人の会」や「赤十字奉仕団」で活動された先達に活動の記憶をひもとき語っていただいた。設立当時の社協の活動は、民生委員、婦人の会、赤十字奉仕団の活動そのものであった。お話をうかがったのは冬の晴天に恵まれた2017年12月4日のことで、場所は浦安市の「堀江三丁目自治会集会所」。

お集まりいただいた皆さんは次の方々。

大塚満子さん（昭和2年生まれ）

醍醐和子さん（昭和5年生まれ）

小山八重子さん（大正15年生まれ）

杉山かおるさん（昭和19年生まれ）

大塚さん、醍醐さん、小山さんの三人は、戦争を乗り越え、時代の大きなうねりのなかで家事、育児、仕事等をこなしつつ婦人会活動に尽力されてきた。大塚さんは、婦人の会連合会の会長を長く務め、また、うらやす社協の会長も歴任された。杉山さんも婦人の会連合会会長を務められ、現在は婦人の会連合会の顧問で、社協の副会長も歴任されてきた。

浦安の社会福祉の原点

まず、浦安の社会福祉の原点にさかのぼってみたい。しかし残念ながら語れる人は存在しない。資料によると、現在の社協活動の始まりは、民生委員と赤十字奉仕団の皆さんが協力して活動を始めたのがきっかけで、その活動に当時の浦安町役場職員が兼任の形で加わり、戦後の混乱の中で



必要に迫られてできたものだ。会の先達のひとり、第二代浦安町婦人の会会長の松尾すゑ氏は会の十周年記念号、刊頭挨拶で、戦後の様子を述べている。

「敗戦後の虚脱感は津々浦々に及び、生活苦は筆舌につくしがたいものでありました」（浦安婦人の会十周年記念号『うらやす』昭和36年刊行より）

浦安ではそこにキティ台風の襲来という試練が重なった。当時、人口1万人ほどの小さな町。復興・平和な明るい社会に向けて一致団結しなければならなかった。

昭和26年（1951）4月

「浦安町婦人の会・浦安町赤十字奉仕団」発足

「浦安町婦人の会」は、会員相互の親睦、婦人の教養向上、文化向上、町全体の啓発を目的として結成された。集うことができる公の施設がないので、町内唯一の映画館で総会を行った。ただ当時は婦人会活動の目的が理解されがたく、いろいろと苦勞もあったという。

― 婦人の会の成り立ちを教えてください。

醍醐さん 戦争中の国防婦人会が戦後に新しい今の婦人会になりましたね。また、古くから赤十字奉仕団ができた

ころは赤十字奉仕団と婦人の会がいつしよで、区別がされなかったようです。

浦安町婦人の会の前身について浦安市史に次のような記述がある。

「第2次世界大戦中、国の要請で結成された大日本婦人会浦安支部（昭和20年6月、国民義勇戦闘隊に編入されることになり、解散）で、当時支部長であった大塚てい氏、副支部長であった浜野てい氏らが、それまでの婦人の会から脱却し、新しい時代に即応した民主的な婦人団体をつくろうと発足させたものである。」（『浦安市史 まちづくり編』1999年3月発行より）

婦人会活動に対する理解や認識が薄かった時代

―婦人会活動を始めたきっかけを教えてください。

大塚さん うちは、おばあさん（姑・大塚てい氏…初代日赤浦安町分区奉仕団委員長）が婦人会活動に熱心だったから、入れ替わりで私がやることになったちゃって…。浦安にお嫁に來た昭和24年から会員でしたが、本格的に始めたのは昭和53年に社会教育委員を前の会長から引き継いだ時です。たしか、あの頃は女の人はだいたい入れられちゃった

からね。

醍醐さん 私が会員になったのは結婚した20歳の頃ですが、活動を始めたのは昭和42年に頼まれて婦人の会副会長になってからです。家庭裁判所調停委員や裏千家淡交会幹事などに従事していたので、その後は会計だけ受けてきました。小山さん 昭和26年に会員になったけれど子どもが3歳では活動に参加したくてもできなくて…。昭和37、38年頃から実際に活動を始め、貝むきの仕事をこなしながら、気がつくくと半生を婦人の会とともに過ごしてきました。

あらゆる活動の担い手だった婦人の会

婦人の会は、ありとあらゆる活動に駆り出される、当時の社会において、なくてはならない貴重な団体だった。

募金活動は戸別訪問

小山さん 婦人の会はあの頃一番大きい団体だったから、なんでも先頭たってやったよね。

大塚さん 募金活動を思い出します。全部、戸別訪問です。当時は家に誰かしらいたので。

小山さん 募金の箱ぶら下げて一軒一軒まわる。そりゃあ大変だよ。でも戸別訪問だと、お陰様で募金がたくさん集まるの。あの頃は募金の金額を、他の地区と競争しながら



大塚満子さん



醍醐和子さん



小山八重子さん



杉山かおるさん

やってたね。募金を集めるのに一生懸命だった。昼間留守だったら、夜、また行って。堀江、猫実、当代島と一斉にやらないと駄目だったからね。同じ日に大変でしたよ：ほんと。こき使われた（笑）。

醍醐さん 中央公民館に集まり、一軒残らずすべての家をまわりましたね。支部長さんも、競争だったから一生懸命で：。どこの地区がいくら募金が入ったかが分かるから。

小山さん いつだったか社協の募金箱が6区分で合計6個きたら、新人の民生委員さんが、男のくせに泣きべそかいてたね。私が「待ってなさい。すぐに取りに行くから」と電話をかけ、募金箱を次々に受け取りに行つて、箱が目の前からなくなると、その民生委員さんは心底ほっとしてたつて。

生活に余裕のない時代、一軒一軒ドアをたたき、募金を



婦人の会の募金活動(昭和46年頃)

集めるご苦労はどれほどだろうか。それでも競争しながら集める彼女たちには気力と知恵、活動力があつた。しかし、時代は移り変わっていく。

醍醐さん 戸別訪問はあの頃だからできたわよね。東西線ができてお勤めする方が多くなったら、募金で何うと「子どもがいてうちは外に働きに出不来なのに、お隣は共働きでうちよりお金があるのに、なんでうちが募金をしなきゃいけないの」なんて言われたり。そのうちマンションが建つて、オートロックで入れないようになった。それでそれ以降は自治会で集めるようになったのです。

昭和30年度、共同募金・日赤募金は東葛飾郡下1位の完納実績が認められ、共同募金会より表彰された。浦安婦人の会の活動は多方面から評価され、これまで数々の表彰を受けてきた。

商品売買で活動資金を捻出

醍醐さん 会長が八子さん（八子せつ子氏…第四代浦安町婦人の会連合会会長・第二代日赤浦安町分区分奉仕団委員長）の時だったかな。最初のうちは補助金が無いので、商品の売買で活動資金を稼ぎました。昔はディスカウントストア

ってないでしょう。だから寝具、呉服類、電化製品、物干し竿など地元の商店会に協力していただき、豊受神社社務所の2階で会員の方に安売りしたのです。

小山さん 私は物干し竿をずいぶん売ったよ。長い竿かついでせつせつせつと運んで。

杉山さん 婦人の会の販売は、いまでも続いていますよ。そうめん、昆布、お芝居のチケットなど…。

補助金のなかった時代。婦人の会は、活動資金を自分たちで捻出しなければならなかった。知恵を使い、汗を流し、苦労して作るしかなかった。

交通安全婦人部発足や消費生活モニターも

醍醐さん 婦人の会役員として警察から委嘱を受けて交通安全婦人部に就いた昭和48年には、まだ警察署が浦安になく、年に数回の会議は行徳まで行きましたね。行徳橋の手前のお宮があるところです。浦安に警察署ができるまで数年間は通ったかな。またその同じ年に、役場に消費生活課が新設され、最初の消費生活相談員をやりました。当時はクリーニングの苦情なんかが多かったです。昭和49年、婦人の会に消費生活モニターを20人委嘱。スーパーに行つて値段の高い安いや、どんなものが置いてあるかを調べに行

ったのを覚えています。

昭和51年、「第1回不用品交換会」を開催

大塚さん それから不用品交換会をやりました。体育館が会場だったので寒かったですね。

小山さん ほんと、寒かった。たしか2月だったよね。

浦安婦人の会の不用品交換会はとて有名で、社協会長の
大塚が市の広報課に所属していた頃、NHKの生放送の番組
で不用品交換会の内容をいきなりいろいろと聞かれたこと
があったらしい。

が。あったらしい。

浦安市史によると、

「家庭で不要になった
ものを、自分が希望す
る値段をつけて出品し、
売れた場合にはその売
上金が支払われるシス
テムで、販売作業を市
と実行委員が行うところ
がフリーマーケット
とは異なる。また、例
年売上金のうち、10%

を運営費として差し引き、これから必要経費を除いた残金
を、市の社会福祉協議会に寄付している。」（『浦安市史まち
づくり編』1999年3月発行より）

平成5年（1993）ごみゼロ運動

大塚さん ごみゼロ運動は婦人の会が先頭にたってやりま
した。今でもよく覚えています。

小山さん ドブ掃除もしましたね。じょうろを買ってやつ
たね。毎月1日、15日の午前中は地域ごとに市内を清掃活
動。その後、この活動も自治会に切り替わったね。

あいさつ運動も始める

大塚さん 「ごみゼロ運動」といっしょに「あいさつ運動」
もやりましたね。浦安の人は恥ずかしがり屋で挨拶しても
返ってこなかったり。でも、会う人、会う人に、「早なせ
う」（おはようございます）と。

独居老人の戸別訪問と裁縫奉仕

醍醐さん 老人宅を戸別訪問して話し相手になったり、老
人のものを縫う活動をしました。浦安だけでは人が少ない
ので、バスと電車を乗り継いで、千葉市まで行きました。
本八幡までバス、その後総武線に乗り換えて千葉県日赤支



不用品交換会

部まで行って裁縫の奉仕活動です。老人のためのおむつや着替えがしやすい服とか縫いましたよ。

まだ（東京メトロ）東西線がなかった頃で移動はバスと旧国鉄の電車を乗り継いで往復3時間以上。赤十字奉仕団の裁縫奉仕活動で活躍された醍醐さんは「多忙で遠方への出張には行かなかったので、自分は写真にあまり写ってない」と笑う。

地域防災訓練で給食活動、おにぎりを1000個つくる



7都県市防災訓練給食活動

大塚さん 9月末ごろ

になると市役所から恒例の防災訓練で炊き出し訓練があり、おにぎりを1000個ほど作ってと頼まれるの。みんなで三角巾かぶって、エプロンつけて。おにぎりを結ぶ人、塩をつける人に分かれて。

小山さん 会場まではバスじゃめんどくさい

から、自転車で行った。たまに送迎バスが出るけど、自転車でその前に行っちゃうんだよね。

大塚さん あのころは道路が混んでなかったしね。

醍醐さん 埋め立てが始まると、防災訓練の場所がだんだん遠くなっていった（笑）。来賓の方が、浦安は防災訓練毎年やってすごいな、お金持ちだよな。って。浦安は財力がうなぎのぼりだったから。

緑のうわっぱりを着て活動

―婦人の会の皆さんはいつも緑のうわっぱりを着て、さっそうと活動していましたね。

醍醐さん はい。緑のうわっぱりは、袖が大きいでしょう。昔は、着物を着てるから、着物の上から着れるように袖が大きくできていたのよ。

小山さん 私の緑のうわっぱりは3枚目。過去の2枚は使えずではげちゃった。これを着ると気持ちが引き締まります。戒めのうわっぱり（笑）。悪い事はできない。もちろんしないけど。

大塚さん 話はずきないね。

女性にあまり自由がなかった時代。婦人の会に携わるには、何より本人の意思、生活のゆとり、そして周囲の理解

が必要だった。

―婦人の会活動に対して家族はどう思っていましたか。

小山さん 出歩いてばかりで家にはいないものだ和家人はあきらめていたね。カレンダーを見ても、婦人の会の活動が何もないという日はなかったしね（笑）。

大塚さん 本当に忙しかった。今から考えると信じられないくらいよく動きました。うちの場合は主人に話を通っていたので問題はなかった。それにおばあさん（姑）はずっと婦人会活動をしていたから。だから浦安に私がお嫁にきた時、留守番ができておばあさんが本当に喜んだの。あの頃はうちのおばあさんってよく出かける人だなあって…。いま考えると、おばあさんは浦安のためによくやったと思います。

醍醐さん うちの家族は、浦安婦人の会の活動だと分かっていたから問題はありませんでした。

やること全てが福祉だった

―活動についての想いを教えてください。

小山さん 募金、おにぎり作りなどなんでもやってきた。やるのが当たり前だと思っただし、やること全てが福祉だった。賞状も30枚ぐらい家にあるけど、すべてもらいつくし

たと思う。もう小山さんにあげる賞状はありませんって言われましたね（笑）。

大塚さん とにかく一生懸命でした。ずいぶん働きましたよね。まわりで支えてくれる人にも恵まれたと思います。婦人の会連合会代表として各地の大会に参加するために、いろいろ出向いたのが思い出です。北方領土4島や姉妹都市オーランドや沖縄など…。

小山さん 朝起きた瞬間から会の活動が楽しみでね。ひたすら集中して貝むきをして、予定時間までに終わらせたら、モンペをスカートにはき替えて婦人会活動に出かける。帰ってきたら、また今日とれた分の貝むきをして、懸命に仕事をした。浦安の女は働き者でじっとしていると気持ち悪くなるから…。忙しい時は、婦人会活動に参加したくて朝2時から貝をむいたこともある。みんなと会えるのがうれしかったし、民謡などを習ってみんなと歌うのもとても楽しかった。

―ご苦労したことを教えてください。

大塚さん 当時は本当に大変だったけど、90歳になった今から振り返ると、あの頃は若かったし楽しかったな、いい思い出だと思います。好きでやっていたのかなと思うくらい。

小山さん 苦労があったような、ないような…。不用品交

換会するとき、体育館の舞台で繕いものして、本当に寒かったのが辛かった。でも過ぎちゃえば半分忘れてるから。

言葉にはできないたくさんのご苦勞があったと思われるが、人のため地域のために熱心に活動され、多くの方に喜びを届けた充実感、人生を振り返る年齢に達したとき、ひとときわ輝きをみせるのかもしれない。皆さんの満たされた表情がそう物語る。

これからの若い人へ

小山さん 時代も変わって、今は福祉活動に無関心の人も多いね。かわると損をするんじゃないかと……。でも、若い人にも頑張ってもらいたい。

醍醐さん 横の繋がりを持ってほしいと思います。

大塚さん これからも婦人の会のいいところは残して、いてほしいですね。

杉山さん 私は先輩方に育てられました。いろいろな話を聞いて、本当に社会勉強になったと思います。会議や手伝いが楽しかった。昔のことを知らない人に、いろいろな引き継いでいてほしいと思います。



大きなイベントでは必ず踊ったという評判の流し踊りのゆかたの型紙が代々引き継がれていること、こいのぼりを



婦人の会 民謡流し踊り

洗って干して繕った話、仮装行列用の大きな狸を縫った話。ここでは活動のごく一部しかお伝えできないが、皆さんが、婦人会活動を楽しみながらも自分の時間を捧げ、社会貢献してきた事実がここに記され、未来に伝わることを心から願う。

浦安のために本当にありがとうございます。大塚さん、醍醐さん、小山さん、杉山さん。



相馬和子さん

取材当日、当時皆さんと一緒に活動してこられた相馬和子さんが都合で参加できなかった。記憶力抜群だと言う相馬さん。「ここに相馬さんがいたらねえ」何度も話の途中にその名前が出た。そこで後日、改めて相馬さんにお話を伺った。

母親に支えられた婦人の会活動

―婦人の会活動を始めたきっかけを教えてください。

相馬さん 明治生まれの母が、戦争中に国防婦人会でタスキをかけて活動していたのを覚えています。終戦後にできた婦人の会でも母は活動していたけれど、身体を悪くして辞めて、しばらく空席になってました。母と一緒に入った親戚のおばあちゃんが、もう自分も年取ってきたから、

「かずちゃんやんなよ、婦人の会」って言われたけど、そのころは「まだ早いや」なんて思ってたんですね。それからもずっと誘われていたけど、家で商売してたから断わっていました。それで商売を辞めてから入りました。

婦人の会も、母が元気でいてくれたから続けられたかなと。いつも、「行っちゃっていいよ、やっつくから」って。やっぱり親子だから、嫁さんだったらそうはいかないよってみんなに言われました。その母は93歳まで、明治、大正、昭和、平成と、生きてきました。すごいでしょ。

婦人の会が担った募金活動

―婦人の会に入って、特に印象深い活動を教えてください。
相馬さん 募金ですね。募金ではお金を触っちゃ駄目なんです。箱を出して「ここに入れてください」。お金は直接、募金箱に入れてもらいます。自分ではお金を触らないこと、会長にそう言われたことは覚えていますね。あの当時は生活が苦しく、お金にはみんなすごく執着があったからね。

浦安の婦人の会は最初、日本赤十字社に所属したんですよ。赤十字募金から始まった。千葉県の方から協力を要請されて最初は始まったと思います。その後、市役所の方で、こういう募金もやってくださいと頼まれ、いろいろな募金活動をやりました。まちの中を歩いてね。赤い羽根とか、歳

末募金とか、歳末はちょっと後になりますけど。昔は、社協の会費や婦人の会の会費も戸別訪問で集めていましたね。

―皆さん熱心に募金活動をされたそうですね。

相馬さん 当時、鉄鋼団地の入口あたりに会社が10社くらいあり、戸倉さん（故戸倉恵美子氏）が運転できるから行ってみると、いきなりお札を募金してくれたんです。そのころ募金でお札なんてありえなくて、みんな大喜びしたんです。それで、このへん会社多いから全部歩こうよって。その後、会社がどんどん増えていき、そのうち、鉄鋼団地に行く人が専門になって（笑）。顔の違う人だと敬遠されるからいつも同じメンバー、戸倉さんの自家用車で、大塚満子会長と池田さん（故池田家寿野氏）と戸倉さんと私の4人。なんでもかんでも駆り出されました。

昔は小さいまちだったでしょう。みんな生活するのに一生懸命で、その中で5円、10円と、貴重なお金を募金箱に入れてくれていました。気持ちはあるても募金するのが本当に大変な時代だった。なかにはね、新聞紙で袋を作って二重張りにして、そこへお釣りで貰った1円玉や5円玉を入れて普段から貯めてくださった方がいました。有難かったです。

その後、だんだん貨幣価値も変わってきて：初めて千円

札を会社で出されたときは驚きを通り超し、驚愕でした。躊躇する私たちに、「これは会社全体の気持ちだから」と。そんなこともありました。

会社ができ始めのころ募金に伺うと、大変でしたよ。変に疑われて。実はこういうわけで、浦安町のときに「婦人の会」っていうのができましてねと、会の成り立ちから説明。それで「婦人会」じゃなくて「婦人の会」なんです。の「が入るところが浦安独特なんですよって。それから募金訪問の通知を事前に郵送するようにしましたね。募金を封筒に入れて用意しておいてくれたり、効率が良かった（笑）。

女性に自由がない時代。でも、社会は女性の力を必要としていた

―これまでの活動で苦勞したことはありますか。

相馬さん 苦勞話は話しきれないほどいっぱいありますよ。防災訓練の炊き出しは人数がなかなか集まらなくてね。日曜だから旦那さんが家にいて、ほとんどの主婦は外に出づら。朝8時半集合って、男女同権なんて時代じゃないから、旦那がこれからご飯だっていうのに「俺を置いてどこ行くの？」そういう時代だったからね。

だからね、会議は必ず夜。ご飯をみんなに食べさせて、

「食べててくださいね」と言い残し、会議に出るんですね。会議は中央公民館が多かったかな。ですから婦人の会は、2カ月に1回くらい中央公民館にお掃除も行ってるね、だから気持ちよく貸してくれた。そういう時代でしたね。

―女性に自由がなかった時代ですね。

相馬さん 私は東京の清澄町の女学校へ通ったんですが、当時は珍しいことだったから、「女学校行ってることになるの」ってよく言われました。今考えると、昔の人は女性が教育を受けることを何故受けるのと、どうして言ったんだろうってね。男と女の差があった時代だからね。

だから婦人の会活動も、家族の理解がないとできない時代でした。うちはその点、旦那に理解があってね。「婦人の会」って言うよね、「行ってこい、ご苦勞さま」って言うてくれたから、会議でもなんでも出て行けて、ありがたかったです。

明るく、聡明な相馬さん。家族の温かいサポートに恵まれ、婦人の会のさまざまな活動で貢献してこられた。すべては書ききれないが、元旦開催の名刺交換会、体育祭、花火大会での迷子係の話など、素敵な笑顔でたくさんのエピソードを楽しく語っていただいた。相馬さんの笑顔と機転

は、婦人の会の雰囲気を、永きにわたり楽しく盛り上げてきたのだろう。

「もうそろそろ引退かな（笑）。平成3年に生まれたって一人前なのに、昭和3年生まれだよ、驚くよね」と、楽しくインタビューを締めくくってくれた。



婦人の会の主な歩み

昭和26年（1951）度

浦安町婦人の会・浦安町赤十字奉仕団が同時に発足

昭和27年（1952）度

生活改善委員会が発足 日常生活の合理化の提唱

昭和53年（1978）度

堀江、猫実、当代島の三地区にそれぞれ会長と三役を置く

連合組織となる

昭和56年（1981）度

市制施行に伴い「浦安市婦人の会連合会」

昭和57年（1982）度

婦人の会、会旗、会章の制定

平成12（2000）年度

創立50周年

平成14（2002）年度

浦安市赤十字奉仕団浦安地区として婦人の会より独立

浦安の歴史とともに生き、ボランティア活動や地域福祉に尽力。半生を振り返り「満足だねえ」と語る

【インタビュー】ボランティアの達人・西脇いねさんに聞く

浦安の地域福祉の礎は多くの市民の方々によって築かれ、今日まで支えられてきた。そのお一人、西脇いねさんを訪ね、お話をうかがった。寒気いよいよ厳しくなってきた2017年12月7日のことである。

訪ねたのは、うらやす社協会長の大家、常務理事の金子、そして随伴スタッフなど記念誌編集委員の5人だ。たまたまスタッフの一人はかつて、西脇さんの本づくりをお手伝いしたことがある。『今日もいいあんべえ』増補第二版（平成20年刊行）と『浦安のかあちゃん農家』（平成25年刊行）の2冊だ。何度も西脇さん宅にお邪魔し、『浦安の歴史の語り部』西脇さんからたくさんのお話をうかがったという。

この日私たちを迎えてくれたのは、西脇いねさんと娘さんの市川恵子さん。市川さんは福祉関係の仕事をずっとさされてきた方だ。

昭和54年（1979）3月、

「浦安ボランティア会」を仲間と立ち上げる

西脇さんは大正15年（1926年・昭和元年）のお生まれ。その半生は、激動の時代と言われる昭和とびったり重なる。そして半農半漁の町から埋め立てを経て大きく成長してきた浦安の変遷とも。さらに言えば浦安における地域福祉の歩みとも見事に符合する。さっそくボランティア会のことをうかがってみた。

—西脇さんは「浦安ボランティア会」を立ち上げましたね。その当時のことを教えていただけますか。

西脇さん　そうですね、うちのそばの東西線のガード下をみんなで掃除した頃だったかなあ。草が生えていたし、ゴミ



で汚れていたの。それを仲間たち（女性）で掃除したんだよ。そしたら主人も手伝ってくれたっけなあ。

——どうしてボランティアの会を？

西脇さん 社会情勢も盛り上がっていたからね。つくっちゃったよ。

「浦安ボランティア会」が発足したのは昭和54年（1979）3月のこと。その頃は、ボランティアという言葉自体がまだ一般的でない時代だ。発足時のメンバーは、西脇さんたち近所の人を含めた女性14人。夜に公民館で当時の浦安町役場の職員を交え会議を重ねたという。当時は福祉の手が圧倒的に足りず、町もボランティア組織が必要としていた。

娘さんが当時のボランティア仲間の名前を数人あげると、西脇さんも大きくうなずく。そして今は亡きご主人が掃除を手伝ってくれたことを懐かしそうに何度も何度もくり返し話されるのだ。

「つくっちゃったよ」と、さらっと言った西脇さんだが、その頃ボランティア団体を立ち上げることは大変だったはずだ。一朝一夕にできるものではない。西脇さんとその仲

間たちには、浦安特有の助け合う絆が育まれていたのだろう。その背景を知りたくなってきた。

生い立ちと、苦労の連続、 大変だけど大好きな農作業

西脇さんは猫実の六軒宿に生まれ育った。そして、若くして母親を亡くした。著書に記述がある。

「私が13歳の時に、母は七人目のお産で亡くなりました。それからは、私は母親代わりになって父に協力し、妹弟の面倒を見ながら頑張りました。すぐ下の妹と二人で母ちゃん農家の人たちの中に入り、米作りも一生懸命しました。当時は戦争中でしたので、空襲、敵機襲来などで怖い体験をしました。また、銃後の守りの合言葉でお互いに助け合いながら農業をしました。」（『浦安のかあちゃん農家』より）

西脇さんが22歳の時に父親が急死。急きよ家族のために知人の紹介で結婚した。ご主人は優しいまじめな人で、嫁いだ家は浦安のなかでも大きな農家だった。それからは本格的に大好きな農業に勤しんだ。

浦安がまだ半農半漁の時代、農業はあくまで副業で、担

い手は女性だった。男たちは漁に出て、女たちは子育てをしながら、米やハスをつくり、冬場の海苔の干し場や海苔製造の作業場を確保した。女手だけの農作業は大変なもので、それに子守りまでも加わると助け合い無しではやっていけない。浦安には昔から「ええ（結）^{ゆい}」という助け合いの強い絆があった。

「母ちゃん農家の人たちは皆笑顔で助け合う、至福の時でした。こうしたことがその後のボランティア活動につながっていったと思います。」（前掲書より）

西脇さんには著書が多数あるほか、請われて寄稿した文章も多い。その一つ、浦安市発行「市勢要覧2006」に寄せた文章から抜粋してみる。タイトルは「漁師町・浦安の女たち」だ。

「にぎやかなことが好きな女たちは、自分たちの暮らしよりも考えず、困ったときにはお互い様と質屋から金を借りてまで人を助け、近所の家に病人が出ると、その子どもたちをひきとって、人の子も自分の子も同じように面倒をみていました。こんなこともありました。お金がなくてお葬式の出せない家があると、近所の女たちが集まって無縁

講といって、寄付をもらって歩くのです。事情によっては、かなり遠方まで集めて歩きました。」

「町の広報の『ボランティアをしてみませんか』の呼びかけに、昭和54年3月、『浦安ボランティア会』が発足しました。『ボランティア』—この聞きなれない言葉にとまどいながら、持ち前の世話好きと親切心で、一人暮らしの高齢者や病弱の老夫婦への洗濯や掃除、食事づくり、道路の清掃などをしました。これらのボランティア活動は浦安で最初だと思います。」

今度は、西脇さんの回想を「浦安ボランティア会創立20周年の記念誌」から拾ってみよう。「ボランティア会とはどんな会なの?」「ボランティアとは何ですか?」と昭和54年にボランティア会を作った当時はよく質問を受けたという。そのときどんなふうに答えていたのか—。

「小さな親切をすることなのよ。私たちがほんの少し力を出し合い地域社会のために喜んですることが私たちに出来るボランティアなの。ひとりでは照れくさくて出来ないこともグループでなら楽しんでできます。すばらしい友達の出会ひもありますよ。」

くったくがなく愛情深い西脇さんの周りには自然に人が集まってきた。彼女にはさらに特筆すべき能力、人々を引き込む力とたぐいまれな行動力があつた。

ボランティア会結成の4か月後に船橋でボランティア養成講座(当時浦安町で参加者9人)が開催されると、参加された方々を訪ねて会員になっていただき、その方々が大きな役割を果たしてくれた。結成2年目には会員数は60人。活動は大きく広がり「介護」「手芸」「給食」と、それぞれのグループが立ち上がり、活動の場はたくさんあつたという。

**ボランティアをして、
たくさんの人に喜ばれてきた**

ボランティア会では、お年寄りにお弁当を作って配る活動を始めた。

「お弁当の活動は今も引き継がれていますよ」と社協常務理事の金子が答える。

「交通遺児の基金を最初に作ったのも西脇さんだと、最近偶然知りました」と大塚が続ける。

ほかに、目が悪い人のガイドヘルパーや、独居老人宅の訪問、掃除、布団干し、洗濯など、数えきれないボランティア活動をしてきた。蕎麦屋さんにいただいた蕎麦殻と

布で56個の枕を作ってお弁当といっしょに配ったり、クリスマスプレゼントに靴下カバーを120足編んだりもした。14人の手による小さな灯「浦安ボランティア会」は、やがてたくさんの人の賛同を得て大きく広がっていった。平成29年4月には登録グループ22、会員数459名の充実した組織「ボランティア連絡協議会」へと成長し、少子高齢化時代になくはならない貴重な福祉団体として活動している。

―これまでの活動でとくに印象に残ったエピソードをうかがいたいのですが…。

西脇さん 当代島だったなあ、あるお年寄り夫婦の家が、掃除もできなくて困っている、って聞いたんだよ。そこで、すてんぱれ（晴天。日本晴れ）の日に仲間10人がかりで行って、きれいに掃除したんだ。家中の布団を引っ張り出してずらっと干してあげてね。そしたら、そのご夫婦が「ありがとう、ありがとうって」って、涙流して喜んでくれたんだよ。

昭和57年（1982）4月、

浦安母子寡婦福祉会「ひまわり会」を立ち上げる

浦安母子寡婦福祉会「ひまわり会」も西脇さんたちが立ち上げたものだ。実はその数年前に、西脇さんはご主人を

浦安市母子寡婦福祉会 会長
西脇 いねさん



を努めてきた西脇さんの尽力を見逃すことはできません。
西脇さんは、これまでにボランティア会の初代会長を務めるなど福祉活動に積極的に参加され、福祉会の発展にあたっては多大の貢献、孤児から会員に成長されたものです。
福祉会では、初めに掲げた目的を達成するため、さまざまな事業を企画していますが、出席率は概してよくないそうです。それは、母子家庭では母親が一家の働き手、大黒柱であり、日曜など休日は家事を片づける大事な時間となり、なかなか出席する機会が得られないからです。
しかし、一度出席した人は会の持つ暖かい雰囲気の中で、3回と出席回数が増えてくるそうです。
「母子の人、孤児の人全員に加入していただければ母子のためにも会のためにもなりますぜひ皆さんに入っていただきたい」
会員自身も3年前に御主人を亡くされています。「その身にならなければならぬ」といふ会長は「たいした力になれないかも知れませんが、できるだけ話し相手になっていきたい」と語ります。母子家庭ということでは理屈のない中傷を受ける人があるといえます。
西脇さんからは、福祉に対する情熱が強く感じられますが、その姿勢には気負い、重たいというようにものがある。「自分のできる範囲のことをしていく」という姿勢からは謙虚さが感じられます。
36歳。浦安に生まれ、現在浦安に住む。2男1女の母。保護司。

ふれあいを大切に
「本会は、会員の相互の親睦と明るい希望のある生活の安定と向上を図り、併せて地域社会福祉の増進に資する」
これは「浦安市母子寡婦福祉会規約」第4条（目的）です。
会の発足は去年の4月。そのときは100名ほどの会員でしたが、現在は約220名ぐらいに増えているそうです。
1年間で会員になった理由は「同じ境遇の人たちと助け合いながらふれあいを持ち親睦を深める」という会の方針に共感が得られたからにほかなりませんが、発足以来会長

「広報うらやす」第267号(昭和58年1月発行)

亡くされた。農作業でいつもいっしょだったかけがえのない伴侶だ。
「母自身が寂しさを感じると同時に男手がいない状態を経験し、同じように困っている家庭へ手を差し伸べたいと考えたのでは」と娘さんが振り返る。

現社協会長の大家が1枚のコピーを西脇さんに差し出した。「広報うらやす」第267号（昭和58年1月発行）。大塚が市の広報課に所属していた頃に、「ひまわり会」会長の

西脇さん取材したもので、「ふれあいを大切に」という見出しと明るい西脇さんの表情が印象的な紙面だ。取材のとき、大塚は初対面だった。「目がきれいで、なんて素敵なんだらうって思ったのよ」と目の前の西脇さんに大きな声で伝えている。三十数年越しの「告白」である。

「発足時100名だった会員数が1年数か月後に倍増した」という記事に、娘さんが弾んだ声で言う。

「そうそう、一時期、会員すごく増えたよね。600人位？」

西脇さんは懐かしそうに往時を振り返る。

「みんなで遠足やお花見に行ったよね。武蔵野とか……」
会の持つ雰囲気は温かいので自然に会員が増えていったという。

大塚が称える。「西脇さんの人柄がね、いいのよ。自分も動いて、人を誘って、輪を広げて。」

西脇さんの口から幾度も出てきた言葉、それは「ボランティア活動でも何でも、やるときは徹底的にやったよ」。

母子寡婦福祉会「ひまわり会」の会長在任時、時給を払う形態の母子家庭ヘルパー制度を浦安に導入した。実際に県と掛け合い、当時さきかけである新制度を浦安に引ッ張

ってきたものだ。それは人手を必要とする母子家庭にとっては本当にありがたい制度であり、ヘルパー不足のため娘さん自らもヘルパーに登録したという。

**仲間を連れて浦安小でスクールボランティア
玄関前の植え込みをきれいにする活動も**

西脇さんは浦安小学校の出身であり、母校でスクールボランティア活動をしていたこともある。その活動については、当時の浦安小の校長であり元浦安市教育長である黒田江美子さんにうかがった。

黒田さん 地域に根差した学校づくりということで、学校と地域が連携し大勢の市民の方々にスクールボランティアとしてご協力いただきました。西脇さんはその中のお一人でした。私が浦安小の校長だった平成17、19年頃に地区老人会や園芸のボランティアとしてお見えになられていました。西脇さんのすごいところは、幼なじみのおじいさんやおばあさんたち、お仲間をたくさん連れて来られることですね。植木だったり、手芸だったり、得意な人をその時々連れて来られるんです。ご自分でもボランティア活動されるのですが、こどもたちの活動内容に応じて最適な人を紹介してくださるんです。そのネットワークというんで

すかね、それもまた西脇さんの素晴らしいところです。

黒田校長を驚かせたこんな活動もあった。

黒田さん 浦小のね、正面玄関前の植え込みのところ。「こは浦小の『顔』だから常にきれいにしておきたい」と一人で黙ってやって来て草取りしてくれるんですよ。草が生え始めるとすぐ来てくれて。だいたいいつも午前中でした。それに驚くことにね、時間が経ったところに「そろそろお茶でもどうですか？」って声をかけると、飲み物を持参されていて、学校側には一切手間を取らせないの。東日本大震災後のボランティアさんたちは、お弁当や飲み物を持参するってありましたけど、本当にそのさがけですね。何が必要かを考え、自ら段取りして、道具ももちろん持ってきて、飲み物もちゃんと携えてきてね。

小学校だけでなく、通学路である中央公民館の脇のところに
お花を飾り育てたいという提案もあったという。

黒田さん 西脇さんはボランティアの達人だったと思います。
「やってあげる」ではなく、必要なことは何なのか見極めて
いましたし、関わり方も含めて感心することばかりで

した。私は西脇さんの姿を見かけると心がホッとしました。
本当に達人だと思います。

世話好きという『浦安気質』

「私の人生、満足！」

西脇さんにボランティアをしてきた理由を尋ねると
「もともと世話好きなんだな」にやりと茶目つ気たつぷりに
笑う。

「やりたいことはやってきた」

「人にもたくさん喜ばれたし、私の人生、満足！」

寸分の迷いもなく言い切る西脇さんが目の前にいる。

「浦安ボランティア会」や「浦安母子寡婦福祉会」を立ち
上げ、永きにわたって保護司も務めた。浦安の福祉の先駆
者であった西脇さんからは、1日かかってもうかがいきれ
ないたくさんエピソードがあるはずだ。しかしながら今
日の取材はそろそろ切り上げなければならぬ。

今日、私たちは、西脇さんからたくさんの元氣と希望を
いただいた。人のために活動し、大勢の方に喜ばれ、同時
に自分の使命を燃焼してきた姿に、そこにいた誰もが圧倒
され、心を持っていかれてしまった。

辞しての帰路、師走の寒空なのに、スタッフは皆、心が

暖まっていた。今までいた部屋を振り返ると、窓の向こうから西脇さんが大きく手を振って見送ってくれていた。「西脇さん、ありがとうございます。」

西脇 いねさん

〔略歴〕

大正15年(1926)浦安町猫実14番地(六軒宿)に生まれる

昭和15年(1940)浦安尋常高等小学校卒業

昭和23年(1948)西脇保男氏と結婚

昭和54年(1979)浦安ボランティア会の初代会長となる

昭和55年(1980)保護司に任命される。以後24年間務める

昭和57年(1982)浦安母子寡婦福祉会「ひまわり会」会長となる。以後16年間務める

昭和60年(1985)千葉県母子寡婦連合会福会長となる。以後13年間務める

〔著書〕

昭和60年(1985)句集『鳥雲』

平成5年(1993)『べか舟の町 浦安』

平成11年(1999)『今日もいいあんべえ』

平成20年(2008)『今日もいいあんべえ』増補第二版

平成25年(2013)『浦安のかあちゃん農家』



娘の市川恵子さんと旅行した際のスナップ

ボランティア活動の輪を大きく広げ、専門グループ化 やがて今日の「ボラ連」へとつなげる

【座談会】「浦安ボランティア会」と「手話サークル青べか」の草創期メンバーが語る歩みと展望

とびきり寒かった冬が過ぎ、ようやく春の訪れを感じる
2018年3月7日、浦安の地域福祉のさががけ「浦安ボ
ランティア会」と「手話サークル青べか」で活動してきた
5人の皆さんから社協の会議室でお話をうかがった。

お集まりいただいた皆さんは次の方々。

浦安ボランティア会

菊仲明代さん（昭和11年生まれ／昭和56～57年度会長）
小林由美子さん（昭和14年生まれ／昭和58～61年度、
平成3～10年度会長）

森田光子さん（昭和17年生まれ／昭和62～63年度会長）
今泉美地子さん（昭和9年生まれ／平成元年・2年度
会長）

手話サークル青べか（浦安ボランティア会所属）

平野昌江さん（昭和20年生まれ／昭和62～平成8年度
会長）

浦安初めての福祉ボランティア団体「浦安ボランティア
会」で会の基礎を担いながら、浦安の福祉を牽引されてき
た皆さんだ。

昭和54年（1979）3月、

「浦安ボランティア会」発足のころ

「浦安ボランティア会」は、《ボランティア活動をともし
て心のふれあいを大切にし、信頼と誠意と和をもって地域
社会の福祉増進に寄与すること》を目的とし昭和54年3月
9日、初代会長の西脇いねさんを中心に10数名で発足。ボ
ランティアという言葉が一般的ではない頃、「出来る活動か



らとりくむ」を合言葉に、福祉団体との交流や独居老人住宅いこい荘のお年寄りを対象に活動を始めた。2年目には会員数が60名を超え、グループでの活動をスタートさせた。

― 発足した当時のことを教えてください。

菊仲さん 昭和54年に船橋で開かれた『ボランティア養成講座』参加がきっかけとなり「浦安ボランティア会」の活動がスタートしました。最初の頃は給食作りやガイドヘルプ、老人への付き添い、障がい児の在宅介護などいろいろやっていました。そのころ欲張って、手芸だ、民謡だ、拡大写本だとか、いろいろな思いつくことをみんな口々に言って、それら全部を右往左往しながらやってたんですよ。そうしたら、だんだん会員が増えてね。得意、不得意が出てきたので、それぞれの得意分野でボランティアしていただくことで分かれたのが、現在のボランティアグループにつながっています。

小林さん 当時は旧役場の福祉課横の部屋に社協があり、2人の担当職員がグループを引っ張ってくれたと思います。とても一生懸命だね。事務局の方もいっしょに活動してくれて足並みがそろっていたんですね。対等に、同じような立場で話し合いをして、いろいろなことを進めていきました。

※ボランティアグループ

昭和55年9月「給食グループ」「手芸の会」／昭和56年4月「手話グループ」、5月「点字朗読グループ」、9月「介護グループ」／昭和57年3月「民謡踊りグループ」／昭和60年4月「拡大写本グループ」／昭和61年4月「青少年グループ」／平成4年4月「話し相手グループ」それぞれ発足

当時の浦安とボランティア

森田さん 最初の頃、付き添いボランティアでお年寄りを病院へ連れていくと、知らないおばあちゃんにね、言われたのよ。「おめーらなんだかー。いくらもらってんだか。」浦安の言葉だから「おめーら」って。昭和56年のことです。菊仲さん 〓ボランティアとは何ぞや〓の時代ですよ。

森田さん そのおばあちゃんに、浦安にも「ボランティア会」っていうのが結成されて、これから自分の空いている時間を、もしも手伝えるなら、手伝える時間だけ手伝う形なのよ、交通費は自前で〓って説明したの。そしたら「あー、ボランティア」って言われたのよ。その頃からよね、浦安にもボランティアが認識され始めたのは。



ボランティア会の給食グループ

昭和55年（1980）9月「給食グループ」発足
中央公民館で給食作りがスタート

―当時の給食活動について教えてください。

今泉さん 私が入会したのは昭和61年頃です。その頃は独り暮らしのお年寄りを主な対象として、月2回木曜日にお弁当を作っていました。だいたい女性20数人で、1回に100食ほど作り、自分たちで配達します。あの頃はほとんど煮物弁当で、大根の煮物やイカと里芋の煮物なんかが多かったですね。朝8時半ごろ中央公民館に集まり作業、

11時過ぎにはもう手分けして配り始め、お昼前には届けていました。浦安のお昼は早いらしいから。届け先は旧市街が多かったです。

この給食活動は、同年（1980）8月の独居老人住宅「いこい

「庄」でのおしるこ会がきっかけで始まり、現在も続いている。『浦安市史』では、高齢者を支える地域福祉の一つとして取り上げられている。

「独り暮らしのお年寄りに月2回、お昼に手作りのお弁当を届けるボランティア。献立は栄養やカロリー重視ではなく、『楽しみのための食事』がテーマ。届けるときは安否の確認も忘れない。昭和55年から活動しているグループで、約60人のボランティアが献立作り、食材の買い出し、調理、配達をまかなっている。」（『浦安市史 生活編』1999年3月発行より）

お弁当の配達—待っているから、
なんとかして届けたい

台風襲来で暴風雨の中、配達

平野さん あるとき台風のどしゃ降りの中、お弁当を届けに行ったんですね。配達の自転車の音が聞こえないくらい雨がひどく、「こんなにちは」と玄関のドアを開けたら、おばあちゃんがもう正座して頭を下げてすでに待っていらっしやるんですよ。雨でも来て良かったと感じる、本当にボランティア冥利に尽きる瞬間でした。忘れられません。

同じ家に何度も何度も

今泉さん お弁当の配達で困ったのは何回行っても留守の



菊仲明代さん



小林由美子さん



森田光子さん



今泉美地子さん



平野昌江さん

時ですね。皆さんお弁当を心待ちにしているので、同じところ3、4回配達に行ったことがあります。人によっては「洗濯機の中に入れてください」と言いますが、それは絶対にできないことです。お弁当を届けるまで同じ自宅に何度も行く。そういうことはこれまで幾度となくありました。

苦勞した東日本大震災の時

今泉さん いつもお弁当は社協の調理室で作っていますが、東日本大震災の時はこも被災していたので、業者からお弁当を取り寄せたのだと思います。2人がかりで仕分けし、配達できない所へ2人で行こうとしたのですが、液化化で届け先の家にたどり着かないんです。非常時だからこそお弁当を待っていると、なんとかして届けようとあきらめなくなかった。しかし、道路に綱が引かれ、通れません。もうどうやって行けばいいのか分からない。車ですので余計に勝手が違うんですね。

ただあの時は、社協の廊下いっぱいに災害ボランティアの人がいて、とても胸が熱くなりました。大勢の人が浦安のことを心配してボランティアに来てくださり、とても嬉しかったです。

昭和56年（1981）9月「介護グループ」発足 介護ボランティア活動スタート

3人体制で介助―階段の移動（戸建住宅）

森田さん 介護・付き添いは基本2人で行動しますが、たまたま3人（うち男性1人）で、体の不自由な70代の男性を病院に連れていく時のことです。迎えに行くと、あいにく家族の人が不在。そして、付き添いをする男性は戸建住宅の2階に住んでいたのね。もう階段が急でどうやって下ろそうかと素人3人で頭をかかえちゃってね。仲間の男性がおじいさんをおぶって降ろすと言うけど、階段から落ちて怪我されたら困るから、紐を探して、それでくり、1人が前を抱きかかえるようにして、後ろは女性2人で。怪我をさせないように必死で階段を1段ずつ踏みしめて下した。階下に無事下ろした時は、みんな冷や汗を噴き出しながら、「あー良かったねえ」って喜びました。全員40代の頃、若かったからできたんだと思います。

3人体制で介助―入浴

平野さん 障がいのある方が急にけいれんを起こして、無意識に殴られたりすることがあるんです。ご飯を食べるだけでも大変で、ご飯の時は体を動かないようにして、喉に

詰まらせると大変なので家族が食べさせます。準備中にいれんが起きたりもするんです。お風呂に入れるときは命綱をつけて入浴介助するから最低3人は必要。1人が命綱を持ってあごをあげて、1人が頭を洗い、1人がお湯をかけます。でも、さっぱりした顔を見ると、ああ、良かったねえ」と思いますね。

4人体制で介助―階段の移動（公営住宅）

菊仲さん 車いすの人を階段を使って住宅の5階から1階まで下ろす。散歩でもなんでも女性4人がかりで、みんなで声をかけながら力をあわせてやりました。

4人体制で介助―駅の階段の移動

菊仲さん 車いすの学生さんが大学のセミナーを受講するので、東西線の浦安駅から飯田橋までの通学と受講の介助をしました。受講の付き添いは2人1組で、送り迎えは4人がかりだったね。

平野さん 送り迎え両方できる人はどこかでお茶を飲んで待ってる。2班でやったりね。

森田さん 駅の階段が大変なんです。エレベーターはないし、エスカレーターはないし。それを4人がかりで上げるんです。下ろすのも、上げるのも大変だった。怖かった

よね本当に。大変な依頼は受けなくてもいいのですが、でも待ってる人がいて依頼がくると「できるよね」と受けちゃうんです。

昭和55年（1980）12月1日、

「手話サークル青べか」発足

「手話サークル青べか」は、『聴覚障がい者と健聴者との交流、親睦をするなかで、手話を学び、お互いの問題を話し合い、活動を共にする』ことを目的とし、昭和55年12月1日、会員46名で発足。（初代会長 堀内英治氏）



手話サークルの練習風景

そのきっかけとなったのが昭和54年、市で初めて開かれた手話講習会だった。10月から年末にかけて延べ10回開催。65名が受講。そして、翌年の春、手話講習会終了有志が集まり「手話サークル設立準備委員会」が発足した。

―「手話サークル青べか」発足について教えてください。

平野さん 上の子どもの小学校入学をきっかけに、勤めていた役場を辞めたのが昭和54年、34歳ぐらいのとき。ちょうど手話の講習会が浦安で2回続けて開催されました。講習会のあと中央公民館で反省会があり、町長さん（熊川町長）と福祉課長さんが出席されました。参加された皆さんから「このまま終わらせるのがもったいないので会をつくったらどうか」という意見が多く出されました。そこで、新しい会を作ると決め、その場で連絡員を選ぶことになり、私が町長から指名されました。主人が役場に勤めていたので、「旦那には課長から言っとくから（笑）」と。まだ下の子どもが1歳の時でした。

後に初代会長となる堀内さんと一緒に、私は3番目の子どもをおぶって、堀内の奥さんもお子さんを連れて、船橋や松戸、千葉、市川へ講習を受けに行きました。これも主人の理解があったからできたことです。私を含め辻本聖子さん、橋本ルミ子さんの3人が選ばれ連絡員になり、手探りでの出発でした。それこそその市町村へ行くのがやっと。1泊の研修会ときは子どもを実家に預けて参加。旅館のロビーで堀内さん夫婦と私たちで話し合いました。サークルをどうやって作ろうかと：夜中の2時、3時まで。あの頃は若かったからできたのでしょうね。

大きくなったら

世間の人に恩返しすると決めていた

―ボランティア活動を始めたきっかけを教えてください。

森田さん たしか12月の広報の給食ボランティアの募集ですね。子どもが小学3年生になり、自分の時間が少し空いたので、夫に相談したら、みんなのためになるなら、家庭を犠牲にしなければという条件で賛成してくれました。

ボランティアをやっていて、人に助けられたこともあり、自身の成長と、そして何よりみんなと楽しくやってこれたことが嬉しいです。これからも続けていければと思っています。

菊仲さん 40代半ばで浦安へ越してきて、広報の「ボランティア養成講座」に参加したのがきっかけです。講座を受けながら、自分がとても幸せだと感じ、人にも何かしてあげたいと思いました。それにボランティア活動のシステムが広がることは自分のためにもなるので、いま作っておかなければと。人のためになりながら自分のためにもなることをやるのはいいことですよね。で、80歳超えた今、自分より年下の人を介助することが増えて、歳言えないんですよ（笑）。

小林さん 両親を早くに亡くし、母方で育てられ、いろいろ

ろな人にお世話になったので、大きくなったら世間の人にお返ししようと小学生の時から考えていました。実際に始めたのは、給食ボランティアからで、社協の松浦さんから声がかかり、子ども連れで参加しました。そうすると主人からも許可が出て。実際には、皆さんが面倒見てくださったりして、あの子たちにとっても良かった経験でした。

今泉さん 40代後半で、主人が定年間近になり、浦安に引っ越してきました。時間ができたので自動車運転免許を取りました。そしてちょうどそのころ広報で給食ボランティアの募集を見て、車の免許を取ったばかりで人は乗せられないけど、お弁当なら配達できると思います」と小林さんに連絡しました。

平野さん 私には手話をやりたいきっかけがありました。私が生まれて17日目に母が亡くなり、私は母の実家のお菓子屋さんで育ったんです。そこにお菓子を買いにくる聴覚障がい者のおばあちゃんと、別の家の青年がいて、ずっとそのことが頭にあったんですね。その後、聴覚障がい者と話すときに役に立つと知ったのが「手話」でした。浦安で手話の講習会があり、絶対に手話を勉強したいと思ってた念願がかないました。

得るものがたくさん、失うものはない

―ボランティア活動をして良かったことを教えてください。
菊仲さん 浦安に引っ越してきて、さっと馴染めたのは「ボランティア会」に出会ったから。お弁当の配達で、細い路地を迷いながら自転車で走り回ってたら、あつという間にまちに馴染んじゃった。10人単位のお友達がすぐできてうれしかったし、楽しかった。出かけた先で得るものがいっぱいで、失うものはないですね。多少、朝が早くて寒いくらいで。いま、健康のバロメーターはボランティアから本当にうれしいことがいっぱいあります。それこそ生涯の友っていうのかな…。

小林さん 会員同士、何でも言えますからね。悩み事でもなんでも。

森田さん そうだわあ。

小林さん それいつも感じてます。近所の人には言えないことでも平気なんです。みんな思いやりがある、そんな気がします。

今泉さん 福祉活動をやって良かったのは、障がいのある方に気軽に声をかけられるようになったことです。

ボランティアの芽を育てるために

―今後についての意見や提言をお聞かせください。

小林さん 行政に動いていただいて、学生に向けたイベントをしていくといいのではないのでしょうか。例えば夏休みに、点訳、要約筆記、手話などの技術的な勉強会をしていく。人の講演を聞いて書く要約筆記は、年を取るとだんだん聞き取れないし、まとめられなくなるんです。

平野さん 現在介助グループで浦安市内の多くの小学校の4年生などを対象に「体験教室」を毎年行っていますが、これを市内すべての学校でやってもらいたい。市内での義務化ができればいいと思います。大人になった時に記憶に少しでも残れば、未来につながるのではないか。ボランティアの芽が少しでも育ってくれればいいなと思います。

手話においては、聴覚障がい者も健聴者も同等の立場で、お互いに意見は遠慮しないで喧嘩しても言える状況を保っていきたいです。聴覚障がい者と健聴者が街中で自然と手で会話しているというのが理想です。そうやってほしいと思います。

菊仲さん ボランティアって構える必要はないんですよ。月に1回でもいいから人のために行動できれば、それこそ住み良いまちになるんじゃないかな。手助けすることです。

分の責任になるのでは、と言う人もいますが、否定を先にしたら何もできない。

小林さん 私は子連れで活動しました。お弁当配りも子ども連れ。だから続けられたと思っています。

平成13年1月、

「ボランティア連絡協議会」発足

「浦安ボランティア会」は組織変更し「ボランティア連絡協議会」として発足。「ボランティア活動をするひとたちの拠点」として情報交換や交流の場を提供し、地域の福祉向上にも寄与するために設立された。

浦安市ボランティアセンターに所属する団体から構成され、平成29年4月現在22の登録グループ、会員数は459名からなる。

有志十数人で始めた「ボランティア会」がここまで大きな団体に発展することは、当時だれが予想しただろう。

この会の設立から共に歩んでこられた浦安市職員の故松浦和子氏が20年を振り返り記念誌で次のように述べている。

「特に印象的な事柄は、送迎ボランティアの活動で、その際、自動車の利用をすすめたところ、『ホームへの上り下りはたいへんだけれども、車内の様子や車窓の風景を見せてあげたいので電車も利用したい』というボランティアの方

々の心づかいでした。」(「浦安ボランティア会設立20周年記念誌」より)

皆さんの澄みきった心が、たくさんの仲間の賛同を集めてきた。一人ひとりの純粋な想いがつながりここまで辿り着いた。森田さん、菊仲さん、今泉さん、小林さん、平野さん、本当にありがとうございます。



民生委員・児童委員、保護司として地域福祉に尽力 時代の変遷に柔軟に対応し、今も活動

【インタビュー】社協評議員や理事も務めた税所とみ子さん・折本幸子さんに聞く

春寒の候2018年3月16日、浦安の地域福祉に貢献してきた税所とみ子さん、折本幸子さんから社協の会議室でお話をうかがった。

税所さんは昭和6年のお生まれ、折本さんは昭和12年のお生まれで、お二人とも地域福祉に長年携わってきている。

時代に合わせて、社会福祉の在り方やシステムが変わるなかでの活動だった

—まず、税所さんにお聞きます。民生委員・児童委員になったきっかけを教えてください。

税所さん 昭和55年に浦安に越してきました。翌年の56年4月から富岡地区『京成サンコーポ浦安』の子ども会会長を1年間務め、ちょうど交代の57年に市で青少年補導センターが新しく設立され、市と関係ができていましたので青

少年補導委員になってほしいと依頼がありました。その後、58年に民生委員・児童委員、平成3年からは保護司です。民生委員・児童委員になったきっかけは、新しい地域なので人選が難しく、最終的に市役所からは非やってもらいたいと声がかかったので受けることにしました。その頃は、まだ北と西の2地区で、全体の会議は豊受神社の社務所の2階でやっていたのですよ。

—どんな活動をされましたか。

税所さん 自主運営になるまでは高齢者も少なくほとんど活動はなかったようですね。私の担当地区は比較的高齢者が少なかったです。平成7年に民生委員・児童委員協議会は自主運営に切り替わりました。それまでは市の指導のもとで活動していたので実際、切り替えるのは大変でした。



当時、副会長をしていました。地区が4地区（東西南北）に増えて、地区ごとに活動するようになったんです。ですから、月に1回は会長会と各地区委員会を開催し、今抱えている問題点や今後の活動内容について話し合いました。

訪問時に民生委員を名乗ると嫌われるので、それまでは名前を出さないようにしていましたが、平成12年に民生委員法が改正され、自分たちの方から積極的に働きかけて行く活動になったのです。平成13年の12月からは地区の会長を受け継ぎました。そのころ人数が増えて地区も5地区（東西南北、海浜）になり、各地区会長からの推薦で民生委員・児童委員協議会会長になりました。

いろいろな大きな変化があったんですね。

税所さん 前の会長さんの時にありとあらゆる仕事を任されたので、特別な苦労もありませんでした。役員の方々が、気持ちよく協力してくれたので楽しかったです。当時の南地区の委員は20数人、そのうち男性は3人だったと思います。

自分たちで考えて活動していかなければならないので、地区ごとで、いろいろな企画を立てました。講演会開催、独居・高齢者世帯の方を集めて、手芸や体操のほかに訪問や各種調査など。また、民生委員・児童委員協議会全体で考えて市内の清掃活動や防災マップ作りを行いました。

―民生委員・児童委員として協議会の会長として心がけてきたことはありますか。

税所さん やはり地域のお年寄り、独居の方や高齢者世帯の方々が気持ちよく過ごせるようにと心がけてきました。特に独居の方は1人で外に出てこれないから、そういう方をお誘いして。また側面から、そつと見守ることも。

―折本さんにお聞きします。これまでやってきたことを簡単に教えていただけますか。

折本さん 保護司が1番長いですが、最初は母子保険推進委員、消費生活モニターや相談員など、役所関係の仕事が長かったですね。

―保護司を始めたきっかけをお聞かせください。

折本さん 保護司は平成3年7月からです。婦人の会会長を長くされてきた大塚満子さんに推薦していただき、22年間やってきました。

―支部社協の西2支部の推進委員をされていますが、活動内容を教えてください。

折本さん 「子育てサロン」でおかあさん、おとうさんの子育て支援、月1回の針を使わない手芸教室、舞浜幼稚園

でお芋植えや収穫の手伝いなどですね。幼稚園の夏休み中に水やりをしたり、草むしりをします。堀江橋を越して通うのが大変でね、息が切れちゃう（笑）。

―活動の中で心掛けていることはありますか。

折本さん 呼ばれた時にはできるだけ出ていくことにしています。

―お二人にお聞きします。これまでの活動の中で、ご苦労されたことは。

税所さん 募金活動が1番大変でした。日赤社資、赤い羽根、歳末助け合いなど年に6回ほど同じ企業を回るのですね。初めのうちは気持ちよくやってくださるんですが、だんだん回が重なると「また来たの?」「え、また?」ってどうしてもなるんですよ。「あんたたちこのお金で食べてんでしょ?」「お金もらってんの?」とかいろいろ言われたりもしました。今はないですけどね。

折本さん 法人の募金は途中から振り込みに替わりましたが、ちょうどシステムが変わる頃に募金活動に出向くと「うちはまだ振り込んじゃったよ」「なんで集金にくるんだ」と言われたり、また、「あんたが来たんじゃないだろうがないから寄付するよ」などと、いろいろありました。活動をしてい

て嫌な思いをすることはありましたが、苦労はないです。
税所さん そうですね。

折本さん 最近の募金は楽しいですよ。中学生がいつしょでしょ。「大きな声出して」っていうと男の子なんか本当に大きな声で叫ぶの。子どもたちに張り合いを持たせるために自分が率先して募金を入れたりね。

―福祉活動をしていて、やりがいや喜びは…。

折本さん いろんな人に会えるじゃないですか。スーパーなんか買い物に行くとこっちは覚えてないけど「折本さんですよね？」って言われます。ちよっとした有名人(笑)。
税所さん 民生委員・児童委員の会長になってからは4000人くらい集まる全国大会に毎年参加してきました。また毎月、県で民生委員・児童委員協議会評議委員会会長会がありいろいろなお話が聞けるので、こちらも勉強になりました。



税所とみ子さん



折本幸子さん

ほかに、年1回、千葉県民生委員・児童委員協議会主催の各地区会長1泊研修会に5地区の会長が参加し親睦を深めました。

折本さん 保護司をやっていると皆さんに「大変でしょ」って言われるんです。でも、紋付き袴を翻して朝急いで来て「今日はおばさん成人式だよ」子どもが生まれました「家を建てました」結婚式です」と、今まで関わりを持った人たちから節目節目に連絡があると、そりゃあもう、うれしものです。

税所さん 私も保護司を18年やりましたが、一人ひとりはずごくいい子ですよ。

折本さん 親の責任だとは言いい切れない。私たちの出産・子育ての時代は忍耐と努力でした。しかし、世の中が変わり、今は、女性の職場が十分あります。男女が出会う場所も多く、スーパー、コンビニなどがあり母親としてはとてもよい時代になり、自分の思うような生活ができます。でも、子どもがいる場合は、子どもたちに影響が出てきます。親が子どもを苛めたり、殺したりと悪い事案が発生しています。何が、どれが悪いのか？と思ってしまう。

私は、保護司として少年と面接するときは、優しく母親のように話し、普通のおばさんで接して来ました。おかげさまで更生した少年が多く、母親との話し合いもあり、一

緒に食事をしたり、喫茶店に行ったりもしました。少年たちはみんな良い子でした。面接の時の少年たちとの向き合い方が大切だったと思います。

税所さん 親が外で働いていて、ご飯を食べられない子が多くいますよね。

豊かにしてもらうのはありがたいけれど、何かを犠牲にしてまで広めることはない

―浦安の地域福祉に対して思うことはありますか。

折本さん 私が言うのもおかしいですが、浦安の老人は幸せだと思えますよ。市内にいろいろな施設があり、老人福祉センターでは毎日大勢の方がお風呂を楽しみに来られてね。「ぽっかぽか」のお弁当もね、すごくいい感じで200円。あちこち配達するのは大変だけどね。だからね、これ以上は望めないでしょう。社協だっですごくいい部署が増えたから。

税所さん 今はやることがありすぎて推進委員さんが大変ですよ。

折本さん 推進委員の頭を悩ませないように、社協の職員さんも、しっかりサポートして欲しい。豊かにしてもらうのは本来にありがたいけれど、何かを犠牲にしてまで広めることはないと思います。今ある形の中で充実を図り、わ

れわれ年寄りも自分に責任を持ちつつ元気を保つのがベストだと思います。

―若い世代に対しては。

折本さん 今は60代でもお勤めされているから、なかなか協力は求められないですよ。

税所さん 私の地域の南1支部では、もう若い人が一生懸命やっています。私からすると若い70歳前後の方々です。

思いつきりやってきたので満足

今後の役割はバックアップ

―いまの想いと展望を教えてください。

税所さん 思いつきりやってきたので満足です。どんな活動も思いつきりやってきました。

折本さん 相手からも幸せをもらったり、私も幸せを与えたり…。

税所さん 私はもう歳だから、バックアップに努めます。若い人たちに任せて何か聞かれたら相談に乗ってあげたい。意見を聞かれたりするので、そういう時は意見を言いますけど。前には出ない(笑)。

折本さん 保護司をしてきて思うのは、やはり家庭、親がしっかりしないとイケないってこと。親の責任は大きいで

すよ。

税所さんは、民生委員・児童委員として平成7年～十数年間、社協の心配ごと相談を担当されてきたという。これまでたくさんの方の活動をされてきたお二人。80代の今でも、できる活動を続けている。そんなお二人には、元気な高齢者のお手本の姿とともに、今まで培ってきたそれぞれの経験と見識が輝く、飾らない、ユーモア溢れる、そして限りなく温かい素敵な言葉をいくつもいただいた。

取材も終盤にさしかかったころ、税所さんが言われた。

「思いつきりやってきたので満足！」

それは大きな衝撃だった。この取材の3か月前、同じ言葉を書いたねさん本人から聞いていた。地域福祉に尽力されてきたお二人が、奇しくも同じ言葉で人生を振り返る場面に遭遇し、なんとも言えない深い感慨に再度浸ることになる。長い時間をかけて為されてきた地域福祉活動とその情熱に、ただただ圧倒された。

ありがとう。税所さん、折本さん。これからよろしくお願いします。

税所とみ子さん

社会福祉協議会評議員 平成4年～平成13年11月30日

社会福祉協議会理事 平成13年12月1日～平成19年11月30日

社会福祉協議会南1支部副支部長

平成13年6月～平成19年5月

社会福祉協議会南1支部推進委員

平成13年6月～平成29年5月

民生委員・児童委員 昭和58年12月1日～平成19年11月30日

浦安市民生委員児童委員協議会会長

浦安市南地区民生委員児童委員協議会会長

平成13年12月1日～平成19年11月30日

青少年補導員理事 昭和57年4月～平成13年6月

青少年補導員副会長 平成17年6月

保護司 平成3年4月～平成21年3月

平成16年11月市民功労表彰受賞

平成17年11月厚生労働大臣表彰受賞

折本幸子さん

社会福祉協議会評議員

平成12年9月1日～平成22年8月31日

社会福祉協議会理事 平成22年9月2日～平成25年4月23日

社会福祉協議会西2支部推進委員 平成13年6月～現在

保護司 平成3年7月1日～平成25年6月30日

浦安市保護司連絡協議会会長 平成22年5月～平成25年5月

平成21年11月市民功労表彰受賞

平成23年11月法務大臣表彰受賞

平成25年5月 藍綬褒章受賞

地域密着のたすけあい活動、それは今日の地域包括ケアシステムの活動のさきがけとしての意義も

【座談会】「さくらネットワーク」のメンバーが約10年間続けた活動を語る

浦安の地域福祉の流れのなかで、うらやす社協がまさにこれから始めようとしている地域包括ケアシステムのさきがけ的な活動に取り組んだ「さくらネットワーク」のメンバーによる座談会が社協の会議室で行われた。新しい年を迎え、気分も新たな2018年1月11日のことである。

お集まりいただいた「さくらネットワーク」の皆さんは次の方々。

安藤克子さん（昭和18年生まれ）

榊原恭子さん（昭和19年生まれ）

本田まゆみさん（昭和23年生まれ）

武部晴子さん（昭和24年生まれ）

古谷節子さん（昭和24年生まれ）

民生委員・児童委員であり、社協南2支部の推進委員である皆さん。

さくらネットワーク「お役にたちたい」の活動内容は、日常生活でのちょっとした支援が必要な高齢者の方などに、家事手伝いや買い物支援などの生活サポートサービスを行うもので、地域に密着した助け合い活動を推進することにより、住みなれた地域での生活のサポートと、住民同士による見守りと助け合いの地域づくりを目指して行ったものである。住民のボランティア精神に基づく会員制の有償サービスであり、この事業で提供されるサービスは会員相互が気兼ねなく助け合いの活動をするために、会員相互が負担とならない程度の料金（30分200円）を支払っていた。

約10年続けた活動とはどのようなものだったのか。



平成17年（2005）秋、 「さくらネットワーク」発足

―さくらネットワークができたいきさつを教えてください。

安藤さん 弁天の老人会「弁天喜楽会」の会長だった小林さんが、日頃から地域の高齢化を危惧し、推進委員の定例会や役員会で、これから困る人を助ける活動をしたいと熱く語っていました。その活動、いいんじゃない？ということとでさくらネットワークは始まりました。そんなに熱く燃えて作ったわけじゃないんですよ。みんななんとなくね。武部さん 新たに別の団体を作ったわけではなく、新しい活動をいっしょに始めようということで、社協の南2支部の中で「さくらネットワーク」と名前をつけました。

古谷さん 支部社協の活動の一つです。

平成17年（2005年）の秋、さくらネットワーク「お役にたきたい」が発足。事務所開設の1年前のことだ。

―開設に向けてどのような準備をしましたか。

安藤さん 最初に、南2地区（弁天1〜4丁目、東野3丁目）の皆さんに全戸アンケートを行いました。約4000戸です。《困っている方を支援したい人》と《困っていて支援してほしい人》の両方についてと、どんな支援ができる

かを含めてのアンケートです。

古谷さん アンケートをしたのは平成18年（2006）の4月頃かと。

安藤さん アンケートの結果、支援できることとして挙げたのは、買い物、ゴミ出し、病院の付き添いでしたね。また、「利用者のしおり」と「支援者のしおり」をそれぞれ作りました。

武部さん 弁天2丁目の集会所に集まり、みんなで何回も何回も会議を重ねました。

―アンケートの結果をもとに話し合いをされたのですね。

安藤さん 社協の榎林さんを交えての会議です。料金をどうするかが課題で：無料でやるのかどうか。本当にボランティア（無償）でやると、お礼をしなくちゃなどの心配が出るのではないか。それなら形だけの料金をいただいて：という話し合いを、本当に長い時間をかけてしました。そのあたりの話し合いがけっこう大変でした。最終的に、お互いに負担にならない形だけの料金をいただく非営利の有償サービスになりました。

榎原さん この活動は、まったく初めての取り組みだったので他へ見学にも積極的に行きました。

古谷さん 支部長といっしょに、よく、みんなであちこち

に行きましたね。白井市や柏市。船橋の高根台団地など。武部さん この何がいいとか、あそここの何がいいとか、みんなでいろいろ話し合いながら。

安藤さん 視察は勉強になることは多々あるんですけどね。実際に私たちが取り入れられるかどうかは別でしたね。

平成18年（2006）9月、

「お役にたきたい」の活動がスタート

―実際に開設してどうでしたか？

安藤さん 富岡公民館内（入口の一角のブース）で、作ったしおりを皆さんにお渡しして。利用したいという声はアンケートではあったのですが、実際に活動を始めてみると、支援して欲しい人はあまりいなくて：。皆さんあまり支援してほしいという声をあげなかったんですね。

武部さん 難しいですよ。心構えというか、プライドという大げさですが、手伝わってもらうことにちよっと抵抗を感じるのか、あまり利用者がいなかったことも事実です。榎原さん 反対に、手伝いたい、支援したい、という人の方が多かったです。そういった支援会員の登録はきちんとしてありましたが、それに比べて利用者が少なかったもので、登録はしたけど連絡がないということで、自然にだんだん人が抜けていってしまいました。

―いざ開設したら、支援して欲しい人は少なかったのですか。

榊原さん 家の中には入って欲しくないとか…。

武部さん 困っていても、少し離れた知らない人には手伝ってもらうのはいいが、近所の人では嫌という人もいらっしやいました。実際にそれは難しく、最終的に近所の人を手伝う、地域の人はその地域の人が支援する形になりましたね。

本田さん 私の住まいは弁天3丁目の集合住宅ですが、他の地域とは形態が違うためか、ここでは支援してほしいという人が結構多かったですね。病院の付き添い、簡単な掃除、家のリフォーム後の入浴中の見守りなど、6軒分ほどありました。だから需要はありましたね。



安藤克子さん



榊原恭子さん



本田まゆみさん



武部晴子さん



古谷節子さん

最初の支援は、

病院の付き添いと薬の受け取り

―最初の支援について教えてください。

古谷さん 最初は順天堂病院への付き添いでした。70代くらいの女性でした。

安藤さん 病院の付き添いは、ほぼ1日がかりで2人または3人で交替で対応しました。

榊原さん 自宅にお伺いしてタクシーで順天堂病院まで行きました。車いすを持ってきてまずお乗せするんですが、誘導するのが初めてなので、何しろ私が下手なんですね。そこから先生のところまで連れていくんですけれど、どこに停めていいのかわからなくて…。全部そのおばあちゃんに、

ここにこういうふうにと説明を受けて。本当に一からの勉強でした。

古谷さん その方はお昼を持参し、あの科この科と3力所ぐらい回ります。本当に1日がかりでしたね。

武部さん 診察が終わると、タクシーと一緒に帰宅し、少し時間が経ってから薬を取りに行きました。

―その方の感想などは？

安藤さん それが結構厳しかったですね。病院の始まりに合わせて朝8時半に病院の入口で待ち合わせすると、時間通りに行っても怒られましてね(笑)。相手の方が早くいらっしやって待たせたから。そんなこともありましたね。

武部さん おつき合いが長くなっていくなかで、少しずつご自身の手やご家族について話されるようになりました。話を聞くことも支援の一部で、その役割もちょっとありますね。

安藤さん お子さん夫婦が、老親の通院について配慮すればいいのですが、そういう時代じゃないんだねってことを仲間うちで感じていました。

行政のすきま―洗濯物干し

古谷さん 車いすの方の家で、週2、3回洗濯物を干す作

業を支援しました。そこはヘルパーさんが来ていましたが、ヘルパーさんは本人の洗濯しか干せない決まりがあるようで、家族の洗濯物は干せないんです。その不足分、家族の洗濯物もさくらネットワークが担当しました。干すだけの作業なので1回30分を、3人で順番に行きました。この件はヘルパーさんから来た依頼です。

―感想は聞いていますか。

古谷さん うーん、特に直接的な言葉はなかったんですが……。ただ日常会話も普通にしていたので、ストレスの解消にはなったでしょうね。

1階と2階に分かれて掃除

本田さん 当時70代のご夫婦のお宅の掃除を週1回、2年半程支援しました。

安藤さん 朝、2人組で行って、1階と2階にわかれて掃除します。1回30分の掃除は簡単かと思いきや、そうでもなかったです。

本田さん 基本的に依頼者の家の中に入る時は2人1組です。お家はともきれいなんですよ。帰ったら、自分の家のお掃除しなきゃいけないねって思うくらいでした。私たちの今までの経験だと、きれいなお宅ほどお掃除を頼まれ

ましたね。

依頼が多かった庭掃除

安藤さん 入院するから庭を掃いてほしいという依頼がありました。風が吹くと落ち葉などで庭が汚れるからと、庭掃除の依頼は結構ありましたね。きれいな方は、風が吹いたら…と気になるんでしょうね。独り住まいの方でした。ところが私がいいと思ってお庭に水をばつと撒いたら、その時たまたま家にいらして、その水の音が酷かったんですって。ずいぶん荒っぽい人が来てたって(笑)、後で笑って話されてました。

相談や、話を聞くことも、大切なボランティア活動

安藤さん 総会の資料に年間の利用件数は載せていますが、実際に利用する人は多くはありませんでした。でも、当番制にして誰かしらは毎日事務所に詰めていました。

榊原さん そうすると地域の方が来ていろいろとお話していくんですよ。それも目的の1つなんですね。知らない人でもいろいろな相談にいらつしやいます。ご自分の話をし満足して帰られる方とか、本当にいろいろな方がいらつしやいました。年配の方が多かったですが。

古谷さん 私たち、当番でブースにいるときに日誌を書くんですね。自分で足の爪が切れないお年寄りに、爪切りを持参していただいて爪を切った話や、背中に湿布薬が貼れない方に貼った話などが書かれています。だからふらっとそのブースに来ていただくのもいい感じでしたね。

10年間活動を続けてきて

地域的な課題

武部さん 事務所は富岡公民館ですが、実は富岡は、お隣の支部である南1地区の場所なんです。地区割があるので不都合な部分もあったんですよ。

榊原さん お断りしていましたが、実際に富岡地区からの依頼は多かったですね。

安藤さん 申し訳ないけど1人受けると、引き続き皆やらないやいけなくなるから。それ以前に、最初に担当の民生委員がつくので、やはりだれの担当の民生委員の区域かとなります。そういう理由で自分たちの地域内というくりにしたのです。

支援者不足に対する不安

安藤さん 支援する手が足りなくなることへの不安はいつもありました。支援者が不足して民生委員が推進委員しか

いなかったらどうしようかと…。私たち推進委員はほぼ女性で、掃除とか付き添いなどの支援がほとんどだったからやってこれたんだと思います。男性がいいっていう方はあまりいなくて助かりました。

自分たちの体力への不安

古谷さん 10年の歳月は…。やはり体力がかなり落ちていきます。

榊原さん 腰や膝が痛くなったりして、支援することはもう難しい。爪を切るくらいだったらできるけど、高いところに登ったりはできませんね。

安藤さん 富岡公民館の改装工事がひとつのきっかけになりました。大規模改修工事で長期間の閉鎖。あれがいい機会でした。その時にもうやめようかなと。

さくらネットワーク「お役に立ちたい」の活動は、拠点である富岡公民館の長期間にわたる大規模改修工事をきっかけとして平成27年（2015）9月末で活動を休止しました。時代をさきがけての取り組みで10年という長期間、地域の人を支えてきました。5人はその後もボランティア活動に従事し、想いは何も変わっていません。

さくらネットワークの活動を次へつなぐ

―今後の課題と次世代の育成について。

本田さん 本来に財産だなと思うのは、さくらネットワークの活動を知る若いお母さんたちが「簡単なごみ出しとか、それくらいだったらやるよ」と、自発的なボランティアをやってくれている良好なコミュニティがあることです。だから私としてはそのコミュニティを大事に育てていこうと考えています。

安藤さん 息子家族といっしょに住んでいてもお嫁さんに爪を切っても言えない方もいる。家族といっしょにいても昔と違う部分、そういうところをしっかりと捉えていかなければいけないと思っています。

本田さん やはり気楽に集まれる場所があるのが一番いいですね。

安藤さん 支部じゃなくて、もう一つ下の底辺のところで情報を吸い上げなければということとで各地域にサロンができたんです。

武部さん 私の地区では支援に関し、自治会が組織としていろいろと考えています。私たちがやってきた取り組みをどのように組み込むか。自治会内で地域の人を見守るのが一番力強い。それから女性ばかりじゃなく男性の方に活躍

していただきたいです。お仕事を終えて余裕がある男性の方をなんとか引き出し、出てきていただいて地域に組み込んでいきたいと考えています。

―皆さんをかきたてるものとは？

安藤さん 使命感というほど深くはないですが、困っている人をみたらほっとけないということでしょうか。でもやっていることは十分じゃないですからねえ、本当に私たちはちよつとしかやってないと思っていますよ。

いつも仲間とともに歩んできた

―活動を振り返って、いかがですか。

武部さん 私たち、仲間がいることでずっと続けてやってこれたと思います。ひとりではできなかった。若い方たちをどのように育てていくかが今後の課題です。

安藤さん 一生懸命協力してくれる仲間がいたからやってこれたと思います。この先は、仲間がいる限りは頑張っただけでいいと思います。

古谷さん 主人がヘルパーさんをはじめ、たくさんの方々にお世話になったので、私も誰かのお役にたきたいなという想いでした。皆さんと一緒に活動できるのがすごく楽しいです。また、サロンはさくらネットワークに替わるもの

として本当に地域に根付いたと思います。サロンはファミリーです。

榎原さん サロンでは、私たち民生委員だけでなく推進委員もとても協力してくれています。古谷さんがおっしゃったように、来てくださる高齢者の方と（私も高齢者ですが笑）すごく楽しくやってるんです。これを通して自分も健康で、そして皆さんにも喜んでいただけることをたいへん感謝しています。

本田さん 私は四国の松山の出身で、両親はもう亡くなりました。両親は近所の方や親戚の方にいろいろな面で助けられたと思っています。だからその「恩送り」かなって思っています。親にできなかった事を近所の方にできればいいかなと思います、日々活動をさせていただいています。

今回は、さくらネットの活動をこのようにして知っていただく機会を得ましたが、この活動は推進委員や地域の方々の協力のもとでやってこられたものです。関わっていただいた皆様に感謝しています。

さわやかな春風のような皆さん。皆さんが取り組んだ地域のたすけあい活動を通して、実際に助けられた人、救われた人、癒された人、触発された人、そしてその他にも有形無形のたくさんのものを与えてくれたと思う。

帰り際に「私たち、けんかもいっぱいするんですよ」と
茶目っ気たっぷりの余韻を残して。

安藤さん、榊原さん、武部さん、古谷さん、本田さん、
ありがとうございます。



推されて自治会活動や支部社協活動へ

今も柔軟な思考と行動力で地域福祉に取り組み

【インタビュー】多方面で活動してきた民生委員児童委員協議会会長、渡邊武さんに聞く

春の芽吹き頃。2018年3月19日、浦安の地域福祉に貢献してきたお一人、渡邊武さんに社協の会議室でお話をうかがった。

渡邊さんは昭和19年（1944年）のお生まれ。平成4年から務めた自治会長、民生委員・児童委員を皮切りに、地域福祉多方面で活動されてきた。現在、市民生委員児童委員協議会会長をはじめ、社会福祉協議会副会長など、実にさまざまな立場を兼任されている。

渡邊さんは、サラリーマンや途中から加わった自営業の仕事の傍らで活動を続けてきた。現在もそのスタイルは変わっていないという。主に女性が担ってきた浦安の地域福祉の礎だが、渡邊さんはその点で稀有な存在だ。これから

の少子高齢社会で、担い手として男性への期待は高まっている。仕事との両立など、渡邊さんの経験が世の男性への啓発やモデルケースになればと期する。

平成4年7月、自治会を結成

―これを機に地域福祉活動にいざなわれる

―地域福祉活動を始めたきっかけを教えてください。

渡邊さん 私に浦安に来たのは昭和61年春で、翌年、舞浜3丁目に転居しました。平成3年秋、大三角公園の問題が起きました。公園内の少年野球場に高い観覧席を建設し、普段は施設することを工事開始通知のチラシで突然知らされ、それから半年にわたる工事撤回運動が始まりました。最終的に大三角公園が近隣住民のための「近隣公園」であることで、工事は中止となったのですが、その時に個々の人の



力では限界があることから自治会結成の必要性を多くの人が感じました。それで男女20〜30人で集まって準備委員会が結成され、思わぬ経緯から私が自治会長に就任、それ以来4期4年間務めました。

―当時の自治会の様子は。

渡邊さん 全部で100軒ほどだから、お互いによく知っている。地域のお祭りなんかは、料理持ち寄りで周辺の子どもたちも自由参加。料金も取らない。それでなんの問題もなかったですね。4年目に350軒になったんですよ。そしたら7〜800人の方が集まってくださり、会場の公園はもういっぱい。自治会に対して非常に協力的でいい時期でしたね。

―民生委員・児童委員になったきっかけは。

渡邊さん 民生委員・児童委員の定員が1人増員になり、なり手を探すが見つからない。困り果てて自治会長の私のところに来られた。それまでは舞浜2丁目の担当が見てくれていたのです。私は当時からサラリーマンでした。「年に3回ほど会議に出ればいいんですよ」と言われ、右も左もわからないまま引き受けましたが、実際は違った。周りの方の多大なお力添えがあつて続けることができます。

―民生委員・児童委員として当時はどのような活動をされてきましたか。

渡邊さん 本来はお年寄り、障がいのある方の見守りや地域の実態把握などですね。ただ当時は新興住宅地なので皆さん元気で若く、高齢な方でも60代。それでサラリーマンでもなんとかやってこられたのだと思います。

何をやったらいいか考えるところから始めたのでできることは全部やってきた

社協の組織変更と役割の希求

当時の社協は組織も小さく、仕事範囲も限られていた。支部社協の前身である小地域福祉圏地域ぐるみ福祉ネットワーク事業推進委員会に、民生委員・児童委員は自動的に組み込まれていたが、どのような活動をするかは、まったくの手探りであった。平成13年には10の支部社協が組織された。渡邊さんは西2支部の初代支部長になり、その後10年間務めた。

手探りで始めた活動はやがて支部事業の活動へ

渡邊さん 小地域福祉圏の頃は、いったい何をやったらいいのか、みんなで手探り状態。お祭りやバス旅行などはあったけど、それは別の団体でもできる活動だから。ずっと

悩んできました。五里霧中でしたね。

地域の世代間交流を図る

渡邊さん 男性の役員にアイデアマンの方がいました。その方の最初の提案が環境問題で、空気を綺麗にするケナフの栽培でした。ケナフは種をまくと半年で4～5メートルに成長する。舞浜公園の一部を市から借りて始めたところ、当初は舞浜小学校の児童、後に舞浜幼稚園の園児と、その父母もいっしょにやることになり、ついにはサツマイモも植えました。夏休み期間は支部の推進委員50人位で手分けして水やり。実際にやって気が付いたのが、これは世代間交流だということ。今も続いています。

中高年の健康維持・向上

渡邊さん 次に挙げたのが中高年の健康問題。社協を会場に年1回の健康教室では、近隣の医師を招いて講演会を開催。参加者は90名から多い時で120名、社協の会場は満杯です。あとは、健康サロン。老人会館「舞浜レインボークラブ」で月2回集まって体を動かす活動で、参加者はだいたい60～80代の方が20～30名ほどで、現在も活動を続けています。

待ったなし―日本の少子化に大きな危機感

西2支部の広報紙「ふれあいネット」第13号(2006・9・1)に寄せた「あいさつ」で渡邊さんは、子どもの問題を提起している。

「福祉には『人々の幸福』という意味があります。日本の制度は、人口増加・高度成長時代の構造のままです。

世界一の少子高齢社会を迎え、福祉活動の2つの課題が見えてきます。

『自立支援』と『子供の健全育成』です。高齢の方には、出来るだけ長期間の自立に向け最大限の支援をする、政府は、今こそ思い切った少子化対策を実行し、年齢を問わず、社会全体が子育てに愛情をもって協力し合う…

これが、今の日本に最も必要な福祉活動であると思います。」

渡邊さん 少子化の問題はもう大変なことです。だからあえてこれを書きました。福祉では高齢者のことだけでなく、将来を支える子どもたちのことも大切です。それまでは子どもの話は支部の中でもあまり出てこなかったんです。

子育て支援としてサロンをスタート

渡邊さんの先見の明は一つの大きな契機となった。賛同を集め、当時はまだ珍しい子育てサロンを始めることになる。場所は子どもが多い富士見地区。

渡邊さん 和室にシートを敷いて0歳児の方を対象に、お母さんやお父さんに来てもらって情報交換をしていただく。50代、60代を中心とした女性の支部担当が交代でお世話をします。多い時は30組以上利用される。今も続いています。

支部調整会議で少子化問題に警鐘を鳴らす

各支部長、副支部長が集まる支部調整会議で、西2支部は少子化問題を扱った。合計特殊出生率が1・26の頃で、このままでは人口は今世紀末には5000万人、来世紀末には800万人となり、日本社会の存亡に関わるという話をした。

渡邊さん 真剣にそう思いますよ。ただ、会議後「今の話はショッキングでした。大変なことですよ」という話と「人口が減ることはいいことだと思っています。電車のラッシュがなくなる」という、両極端な話が支部長の中から出たんです。驚きましたね。当たり前だと考えているインフラが、想像を超えて縮小、消滅せざるを得ないのかもしれないに…。

市民生委員児童委員協議会で少子化問題意識は高まった

渡邊さん 民生委員って即、児童委員なんですけど、でもほとんどの委員が児童委員としての意識が薄いと思うのです。それで二十数年前に主任児童委員という専門の立場の人ができましたが、児童委員の仕事は余計にそっち任せになっているという課題があります。民生委員児童委員協議会で少子化、子どもの問題について、最初の2、3年はずいぶんと話しました。でも未だ明確な結論は出ていません。これは本当に難しい問題です。ただ、民児協の中で子どもの問題が大事だ、少子化は大変なことだという認識は高まってきています。

広報紙「みんせい」を市内小・中学校の全生徒に配布

渡邊さん 民生委員・児童委員の存在を知らない人が多いので、広報紙「みんせい」を刷新し、大型化・フルカラー化するとともに、市内小・中学校の全生徒に配って家に持ち帰ってもらうています。これは教育委員会や社協の事務局の方にも非常に尽力いただきました。

仕事との兼ね合いで、

時間的な制約は常にあった

―活動の中で、苦勞したことはありませんか。

渡邊さん サラリーマンや自営業の仕事で、時間的な問題は常にあり、これまで周りの皆さんに負担をかけてきました。これは現在も同様です。長年にわたるサポートを大変ありがたく思っています。それと、新しい提案に対する反応ですね。新しいことを言い出すと、多くの場合、何らかの反発が出ます。その声に納得してもらえる材料を整え、くり返し話すようにしてきました。

少子高齢社会で社協の役割拡大
人材こそ貴重な福祉資源

―今後の社協について。

渡邊さん 支部社協は、民生委員・児童委員はじめ、自治会、PTA、福祉施設など10くらいの団体で構成されている非常に珍しい組織です。また、社協全体としても、各機関との連携を図る形で社会のニーズに伝えていく点で貴重な存在です。そこを生かして考えていかなければと思います。

福祉の担い手である人材の確保・養成・レベルアップへの課題が最も大切な問題。

渡邊さん 少子高齢化が進み、福祉へのニーズが複雑化し

高まるなかで、これを担う人材が最も大切な福祉資源です。

福祉の人材というと、専門職の方を別にすれば、結局は民生委員・児童委員、社協の支部の推進委員が中心になります。この方たちは本当に貴重な存在ですよ。そういう方々が、これから本当に大変になっていく福祉を担っていく。その準備や心構えを少しずつ進めていくことが大事になると、身を持って感じています。

渡邊さんは、サポーター制度・有償ボランティアの導入・世代間交流も自然とできる居場所づくりなど、時代に合う新しいテーマにも果敢に取り組んでいる。

この取材の直前まで民生委員・児童委員関係の会議に出席していた渡邊さん。穏やかな笑顔からは想像できないが、精力的に活動されてきている。限られた取材時間のなかでは、お話をすべて伺うことはできなかったと思う。

日本の未来のために、これからも長く活躍していただけるとありがたい。渡邊さん、ありがとうございます。

渡邊 武さん

昭和19年（1944）生まれ。

○社会福祉協議会

社会福祉協議会評議員

平成10年9月1日～平成16年8月31日

平成19年12月7日～平成26年1月23日

社会福祉協議会理事 平成26年1月24日～現在
社会福祉協議会副会長 平成26年9月2日～現在
○支部社協

社会福祉協議会西2支部支部長

平成13年6月～平成23年5月

社会福祉協議会西2支部推進委員

平成13年6月～現在

○民生委員・児童委員

民生委員・児童委員 平成4年12月1日～現在

浦安市西地区民生委員児童委員協議会副会長

平成10年12月1日～平成25年11月30日

浦安市民生委員児童委員協議会会長

浦安市西地区民生委員児童委員協議会会長

平成25年12月1日～現在

千葉県民生委員児童委員協議会監事

平成26年1月～現在

○その他

舞浜三丁目自治会会長

平成4年7月～平成8年4月

平成23年11月市民功労表彰受賞

平成27年11月千葉県知事表彰受賞

平成28年11月厚生労働大臣表彰受賞

平成29年11月藍綬褒章受章

社協に育てられて



元会長
梅原祥子

私の社協とのかかわりは、母の介護をしながら在宅で出来る専門ボランティアの点訳からでした。転居を重ねて浦安に越してきたのが昭和60年。仕事を持って子育てを頑張っていた娘たちの支援と関西から呼び寄せた母の介護をしていましたが、丁度介護保険制度が施行され、ケアマネージメントの仕組みが制度化された頃でした。

理事時代を含めて、在任中の社協は大きな変革の黎明期だったような気がします。「福祉事務

所」的な形態から地域福祉の担い手としての民生委員、保護司そして多分野にわたるボランティアの方々に支えられて大きく変わってきています。少子高齢化という世の中の流れをバックに国の福祉施策の方向は大きく動き、それを受けて浦安社協の活動もどんどん新しいものを取り入れ発展してきました。在任中最も印象に残っていることは今の支部社協の前身である「小地域福祉圏地域ぐるみ福祉ネットワーク事業推進委員会」と「成年後見・生活支援センター」の設置で、その動きに対応するために、「地域福祉とは」について職員と共に研修を重ねました。浦安は他市町村に比べそれほど大きな面積の市ではないとはいえ、地域の状況の実態は非常に異なり、「地域共生社会」の構築には活動の細分化が必要でした。現在の活発な事業の具現化の基礎になっているものが、すべて細かな地域のニーズの拾い上げからであると思うと、増えてきた職員も含め、関わってくださっている多くの方々に感謝感謝です。

私は小学生のころ大阪の街の中で過ごし、疎開で離れている間に空襲ですべてを灰にしました。そのせいで物への執着がなくなったのだとは思っています。また後年、ある詩人の言葉「求めない」がずっと心にあって、私の生き方や活動の柱になっていたようです。

私は常勤ではありませんでしたし能力もないのですが、できるだけ沢山の出、沢山の人にお会いして、いろんな人を、いろんなものを、つなぐ役割になっていたようです。

80代となった今、物への執着はなく「求めなくても」社協に関わって自然に得られた人とのつながりを大切に、少しでもお役に立てるようお返ししたい思いでこれからも日々を過ごすつもりです。

浦安社協の転換点に身を置いて



元会長
宇田川敬之助

私が「浦安社協」をお手伝いすることになったのは、平成十八年九月、副会長として選任され、出羽さんと共に梅原会長のもとでのスタートでした。

二年間、研修の場への積極的な参加と先輩の方々のご指導のもと、社協の役割である安心して暮らせる住みよい地域社会づくりに取り組ませていただきました。二年後、梅原会長の勇退を受けて会長に就任しました。

その頃、浦安社協は大きな転換点を迎えていました。新築となった「老人福祉センター」の運営を委ねる指定管理者に応募、担当職員の精一杯の努力もあって、指定を受けることが出来ました。総合福祉センターの運営業務に加え、社協は財政的にも人員体制においても大きく発展することに

なったのです。

センターの所長には、後に私の後任、最初の常任会長となる宇田川精一氏を迎え、「利用者に喜ばれるセンター」をモットーに、役職員一体になって事に当たりました。お陰で一日利用者数、年間利用者数共に目標を大幅に上回る盛況で今日をむかえています。

続いて、東野小学校の「児童育成クラブ」の運営も受託出来、今日まで担ってきた諸活動に加え、目に見えて「働く社協」に大きく前進しました。また、地域のお年寄りの「拠り所・集いの場」として、堀江フラワー通りに、関係者のご理解と支部社協の皆さんのご協力で「福祉の交番ぽっかぽか」を開設しました。その後、高洲・富岡と「ぽっかぽか」が開設、地域に沿った活動がされています。中でも特記すべきは、平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災による災害ボランティアセンターの開設でした。はじめてのことに加え、予想を上回るボランティアへの対応や、被害を受けられた方々のニーズへの適切な対応が大変でした。この時、市川市社協の方々がいち早く駆けつけていただき、物心両面でのご支援は忘れられないことの一つです。この間、本部長として、市災害対策本部との連携が課題として残ったと思っています。

通算六年間、在任中いろいろありましたが、今日「浦安社協」が地域福祉の最前線で「市民のために」大いにその役割を果たし、力強く前進していることに敬意を表し、今後の一層の充実発展を期待して止みません。

地域福祉に触れて



前会長
宇田川精一

42年余の市役所勤務を経て、就いた職場が新装なったUセンターでした。今までの職場とはまったく違う分野での再出発です。はじめは、右も左もわからないなか、お年寄りとうどう付き合っていけば良いのか、正直言って途方にくれたこともありました。

しかし、元気なお年寄りと一生懸命お話をし、自分なりに精一杯事業に取り組んでいるうちに、段々と心が通じ合ってくるのが実感できてきました。センターに通ってきてくれるお年寄りも人それぞれ、色々な環境と状況を背負っています。センターは、その一人ひとりに寄り添った対応をしなければなりません。まさに現場での対応が大切です。そう言った意味でUセンター事業は、多岐にわたり、そしてそれらが相互に関連し成り立つのです。私は、この3年間のUセンター所長と

しての経験で非常に多くのことを学びました。福祉現場が担うべきものの重要性も改めて痛感いたしました。

その後、社会福祉協議会の本部に常務理事として迎えられ、やがて会長に就任しました。しかも、私は、常勤の会長として、1年365日、その職を全うしなさいというオファーを受けた訳です。

もう、これには、私の人生のさまざまな経験を生かし、その大役に全身全霊でぶつかっていくしかありませんでした。今までの経験からも社協の事業は現場での対応が大きくモノを言います。社協では、さまざまな事業のなかで多くの人と関わっています。一人ひとりに独自のきめ細かな対応をしていく必要があります。そして、社協の担う地域福祉の現場は、社協職員もさることながら、まさにそれぞれの地域にいらっしゃる民生委員・児童委員の皆様をはじめ、支部社協の推進委員の皆様さんが支えてくれています。

現在、国では我がこと・丸ごと「地域共生社会」の実現を掲げ、地域福祉の充実に地域自らの力を生かすことの重要性を唱えています。浦安では、既に支部社協の皆様方をはじめ、多くの方々の脈々とした活動によって地域福祉が担われてきていますが、まさにこれからがその真価を問われる時代になるものだと思います。地域福祉の貴重な担い手である多くの皆様が生き生きと活動できるように社協本部もまた全霊を傾けて取り組んでいただきたいと切に願っています。

支部社協から【寄稿】

地域福祉を伝える

東1支部

55周年おめでとうございます。

多くの職員・地域の方々に支えられたこの間の暮らしが優しさに溢れたものであったと想像されます。

東1支部発足当時は、浦安で新たな暮らしを始める方々が共に街づくりに加わり、今日に至っています。街づくりは子育てでもあり高齢者にも弱者にも手を差し伸べたものでした。その当時の方々が今も地域福祉の担い手です。

しかしながら担い手自身が年を重ね更には働き方の変化で新たな担い手を探すことが難しくなり、ただ支えるというよりは共に寄り添い支え合うという形に変化してきています。

東1支部の特色として美浜中学校で福祉体験型文化祭を開催し、地域の方々と触れ合いながら車椅子を初めとする福祉体験を通じて人が支え合うということを次代を担う生徒達に伝えております。支部活動に加わってからお困りの様子の見える方々にも、さらに声がかけられるようになったと話された委員さん。この一步を中学生にも是非とも伝えたいことと思いました。お互いさまと自然体で人が支え合う支部活動が続けていきたいと願っています。

安全で安心して住み続けられるように

東2支部

浦安市社会福祉協議会設立55周年・法人35周年誠におめでとうございます。

浦安社協では、赤い羽根・歳末助け合い募金活動・高齢者・子育てサロンの運営、また堀江・富岡・高洲の地域拠点ほかほかの活動など本市に住むすべての方々の福祉増進のために、さまざまな事業を積極的に展開され、さらに成年後見人事業を通し、初の市民後見人が誕生するなど、多くの成果を収められていることに対し、心からお喜び申し上げます。

私たち東2支部といたしましても、子育てサロンや高齢者サロンなどを通して地域の皆さまが安全で安心して住み続けられる町づくりを、推進委員の方々のご協力のもと細やかで心配りが出来る活動をしてまいりたいと思います。さらに、社会福祉協議会との連携、支援のもと地域福祉の充実になお一層の努力をして参りたいと思いますので、よろしく願いいたします。

共に協議を重ねながら

西1支部

先人達の礎により、燦然と輝く歴史の佳節を迎えられた浦安市社会福祉協議会設立55周年・社会福祉法人35周年誠にめでとうございます。

支部社協の前身である「小域福祉圏地域ぐるみ」の時は、地域で何をするのか暗中模索でありました。支部社協が誕生し、事務局、そして地域の推進委員さんと共に協議を重ね、今の形になりました。私達が最初に取り組んだことは、地域の実態を知るため、一人暮らしの高齢者宅の訪問挨拶を行いました。最初は警戒され、なかなかドアを開けてくれませんでした。現在では喜んで迎えてくれます。

その他、約200名の参加者で賑わう「ふれあいまつり」、堀江公民館とタイアップで行っている「いきいきサロン・模擬店の出店」、「子育てサロン」、「推進委員研修」、「大変人気のバスツアー」、「堀江ぼっかばかのスタッフ」等々、活動をさせて頂いております。

今後は世代を越えた交流や防災に心掛け、地域共生にさらに取り組んで行きます。

みなさんの協力で3本柱の目標を実現

西2支部

はじめに「設立55周年・法人35周年記念誌発行」お喜び申し上げます。

私達の住む西2支部は、堀江・富士見・舞浜地区と東西に長く、社会福祉法人になった頃は、旧住民・新住民がかかえる問題も違いがありました。しかし、地区社協の委員の方々が協力し合い、ふれあいまつり・健康教室・子育てサロンや健康サロン等を通じて、地域の輪を広げ、色々な問題を話し合える様になりました。

これからの活動は、西2支部のテーマとして①「子ども・子育て支援」②子どもの健全育成・子育て世代への支援、③「中高年の健康維持・向上」④特にシニアの健康寿命の伸張、⑤「世代間の支え合い・思いやり」⑥シニアと若い世代の支え合い・相互の思いやりの3本を柱として活動していく事になります。

それには、今まで以上に地域で活動している各団体のみなさんと協力関係を密にして、特に若い力「中学・高校・大学生」とコミュニケーションを持って、支部社協の地域力を向上し、福祉活動を行っていきたいと思っています。

「ふれあい、わかちあい、支えあい」

南1支部

地域の人々との交流の場「コミュニティ」とおして相互に支え合う地域ぐるみの福祉をと平成十四年二月「ふれあい広場今川」を立ち上げました。お昼ご飯を御一緒に、囲碁・将棋、指編みマフラー作り、絵手紙と五十人程の方々が集い楽しみました。現在百五回を迎えました。二年後には「ふれあい親子広場今川&富岡」をオープン。子育ての楽しみ、悩みを分かち合い友達作りの場として毎回たくさん参加があります。

南一支部は東野、富岡、今川の三地区で構成されていますが其々の地区のニーズに応えバスツアー、茶話会、サロン、カフェ、子育てサロン、パパママ友俱樂部、ふれあい親子広場等々名前こそ違えど、ふれあいの場が多々開かれています。平成十六年十二月広報誌「みなみの風」第一号が発行、その後一年に二回発行し、地区の活動状況、地区の情報をお知らせしています。

年々高齢化が進み一人暮らしの方も増えています。家中に閉じこもらないで気軽に集える場所が身近に必要なようになってきます。自治会、老人会等地域の皆さんと協力し、今までの活動を充実させていきたいと思っています。

「17年間の取り組み」

南2支部

南2支部社協の設立は平成13年5月15日でした。担当地区は見明川中学校区で高齢化の地域でした。そのため、南2支部は高齢者福祉を中心に取り組みを始めました。県内・県外の先進地を視察して、気軽に集まり交流ができる居場所づくりと、見守り、たすけあいの仕組みづくりが必要だと思い、そのために活動の拠点を探しました。平成18年9月には、富岡公民館内に念願の活動拠点となるコーナーができました。ここを拠点として、たすけあいの輪を育てるため「さくらネットワーク『お役に立ちたい』（会員制）」を始めました。日常生活のちょっとした手助けが必要な高齢者などに、ゴミ捨てや電球交換、家事手伝いなどを行うサービスを行いました。これまでも高齢者相互が支え合う友愛活動をしてきていますが、これからは地域のネットワークで取り組む健康づくりが広がっていくことを期待しています。

皆様と力を合わせ互いに支えあいながら

南3支部

南3支部では、地域の住民同士の仲間作りや健康づくりを大切に、より良い交流を深めて頂けるよう、様々なサロン活動を開催しております。どの事業にも多くの方にご参加頂き、回を重ねるごとに交流の輪が広がっていると感じております。

新たな活動として、誰もが、ふらっと気軽に立ち寄れ、多くの方と交流が出来る場所、『うらちゃんカフェ』への協力が始まりました。また、自治会・老人クラブ等、地区の団体との連携を深め、新しく転入された方や子育て世代の方にも、足を運んで頂けるような福祉活動の充実にも努めて参ります。

今後とも地域の皆様と力を合わせ、互いに支えあいながら、安心して住み続けられる街づくりのお手伝いをさせて頂きたいと思っておりますので、これからも引き続き、ご指導ご協力を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

ボッチャの普及を通して

北1支部

ボッチャとはヨーロッパで考案された障がい者のためのスポーツです。北1支部では、スポーツの集いボッチャ大会を行い、毎回100名以上の方に参加していただいています。競技は2チームに分かれ、ジャンクボール（目標珠）と呼ばれる白いボールに赤・青のそれぞれ6球ずつのボールを投げて、いかにジャンクボールに近づけるかを競います。若い方も、年配の方も、初めての人も、ベテランも皆で楽しめるスポーツです。昨年は社会福祉協議会大塚会長にも参加いただき、皆で楽しみました。今年度は、社会福祉協議会がボッチャ競技のボールを2組用意してくれます。このボールを使用し、各支部が楽しみながら練習に励み、社会福祉協議会支部対抗ボッチャ大会が開催できるようになれば素晴らしいことですね。

地域共生社会の実現に向け

北2支部

浦安市社会福祉協議会設立55周年おめでとうございます。北2支部は北栄1・2・3丁目、猫実3丁目を担当地域としています。推進委員25名、高齢者サロン・子育てサロンを中心に学校や自治会等地域のイベントへの連携も行っています。

支部社協が始動したときは、いち早く一人暮らし高齢者や障がいのある方々のためのサロンを開催してきました。また、夏休み子ども達に向けた工作教室も好評を得ました。手探り状態でしたが、推進委員仲良く活動をしてきたなど感慨深い想いがあります。活動の中でも、子育てサロンは毎回30組程の参加者で多に賑わっています。

私は支部社協の前身「小地域福祉圏地域ぐるみ福祉ネットワーク」の頃から社協とは長いお付き合いです。ますます進む少子化・高齢化を考えると一番大切なのは、地域共生社会なのではないかと思えます。それには地域のボランティアの役割が大きくなる事でしょう。私達もその一端を担っているのだと言うことを喜びとして、社協の手厚いバックアップのもとこれからこれまでのように活動して参りたいと思います。

地域に根付き、交流を深め、地域力を支えます

海浜1支部

浦安市社会福祉協議会設立55周年・社会福祉法人35周年おめでとうございます。

記念すべき年に推進委員として社会福祉に協力ができることをうれしく思うと同時に先人のご努力に感謝いたします。

私が所属している海浜支部は、平成17年6月に東支部より独立して、海浜1支部・海浜2支部となりました。

海浜1支部は、入船1丁目から入船6丁目で構成されているコンパクトな支部です。各丁目で活動ができる利点を生かして、バスツアー、子育てサロン、サロン各種を行っています。平成22年9月からは災害時に使える防災グッズ「いりふねくん」を手あげ方式ですが、70歳以上のひとり暮らしの方、75歳以上の高齢者世帯の方に無料配布して見守り活動も行っています。

今後も今まで同様、地域に根付き、地域の方々と交流を深め、地域力を支える役割として事務局と協力して歩み続けていきたいと思えます。

一人ひとりが責任感を持って

海浜2支部

浦安市社会福祉協議会設立55周年及び法人35周年おめでとうございます。

海浜2支部は平成17年誕生の若い支部でありまして、浦安市民の幸について話し合い、更に地域の人々により密接に仲間づくり、健康づくりを旨として、各部会・役員会・推進委員会を行い、情報・意見等を相互摺り合わせ、検討した事業を展開して参りました。

先日開催されました記念式典・講演会に於いて、白梅学園長の汐見稔幸先生のお話しをお伺いいたしまして、海浜2支部の活動も各々のひとつずつは近づいています。横のつながりまではもう一歩足りないかなと感じました。しかし、方向性は良い方向に進んでいると考えています。

ウェルネスシニアサロンに於いては了徳寺大学、ともづな高洲、南3支部と海浜2支部の4団体で協議のうえで年に3回を開くことが出来ました。昨年の映画会には老若男女90人近い参加をいただきました。さらに、子育てサロン10回、ひのでカフェ（公民館主催）11回と年間を通じて開催でき、多くの参加者に来ていただきました。バス旅行運動も長年を通じて好評開催しております。

幸いにも海浜2支部は、日の出、明海地区の埋立てによ

る新開地のエリアです。全国から移住して来た人々が、各団体から選出された推進委員で形成され、一人ひとりが責任感を持った人材だからこそ、大きな力となっていることを、ひしひしと感じているところであります。



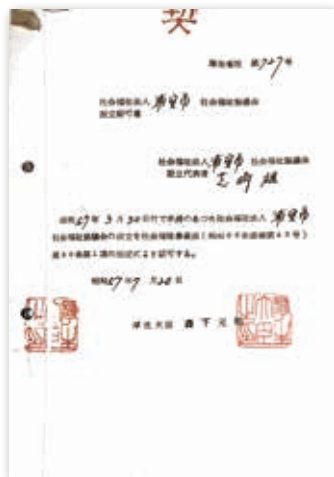
支部社協の皆さん

写真と「社協だより」で振り返る うらやす社協の歩み

おかげ様でうらやす社協は創立55周年、法人化35周年を迎えることができました。皆さまとともに歩んだうらやす社協のこれまでを、写真と社協だよりで振り返ります。



昭和 37 (1962) 年 9 月
浦安町社会福祉協議会設立。浦安町役場福祉課内に事務局を設置。



社会福祉法人設立認可書



昭和57(1982)年秋、
「社協だより」第1号
発行。同年7月、社会
福祉法人浦安市社会福
祉協議会認可を紹介



昭和63年(1988)年4月 事務所を市役所庁舎内から浦安市総合福祉センターへ移転



昭和57(1982)年12月
第1回浦安市社会福祉大会開催



小域福祉圏推進委員の皆さま



昭和59(1984)年4月 心配ごと相談所設置 (3号)



平成2(1990)年4月 小域福祉圏地域ぐるみ福祉ネットワーク事業推進委員会設立(支部社協の前身)
[13号]

まちはいきいき
地域ぐるみ福祉 ネットワーク

地域ぐるみ福祉ネットワーク〇〇地区から
浦安市社会福祉協議会〇〇支店へ

■市内8地区に支部社協設置完了!
7月28日、美浜・入船地区を中心とする「東1支部社協」が設置され、市内全域に支部社協の設置が完了しました。
支部社協を構成しているメンバーは、民生委員や自治会の方々、ボランティア、各校のPTA、青少年相談員など。今後、各地区にお住まいのお年寄りや気軽に立ち寄れるサロンの開設や子育て支援の活動など、より地域の必要性に応じた活動を展開します。

■「北1ふれあいサロン」活動開始!
8月26日、協賛4、5丁目・当代島を中心とする「北1支部社協」では、ふれあいサロン活動がスタートしました。
この日、サロンを訪れたお年よりは、委員やボランティアの方々や昔の通安の話しに花が咲き、終始笑顔でした。
「北1ふれあいサロン」は、各地区に分かれておひとりの暮らしを対応に開催しています。
●これからの日程 9月29日(土) 当代島1-3丁目の方対象
10月28日(日) 当代島2丁目の方対象
いずれも場所は当代島老人クラブ。時間は11時～15時です。
(詳細は社会福祉協議会へお問い合わせください。)
TEL 355-5271

平成13(2001)年5月 支部社会福祉協議会事業開始〔第24号(一部)〕



少年を介護する浦安ボランティア会の人々(グラフ浦安22号より)

福祉だより

うらやすファミリー・サポート・センター
4月1日オープン!!

地域で応援します、あなたの子育て!

浦安より近所を回り、浦安市社会福祉協議会が運営主体となったファミリー・サポート・センターが、いよいよ本活動を開始しました。
うらやすファミリー・サポート・センターは、園や学校や多目的な施設をめぐって、夜間どうしてあげてもよいと「うらやす」を結成します。(詳しくは3月号をご覧ください)

主な内容

おしゃべり会(17時～18時)	200
おしゃべり会(18時～19時)	200
おしゃべり会(19時～20時)	200
おしゃべり会(20時～21時)	200
おしゃべり会(21時～22時)	200
おしゃべり会(22時～23時)	200
おしゃべり会(23時～24時)	200

会員になるメリット

- おしゃべり会に参加できる
- おしゃべり会に参加できる
- おしゃべり会に参加できる

平成14(2002)年1月 ファミリー・サポート・センター事業開始〔第47号〕

ボランティアに関することは……

TEL 80-8864 まで

平成8(1996)年4月 ボランティアセンター開設〔第24号(一部)〕

平成21(2009)年7月 浦安市老人福祉センター(愛称「センター」オープン(第69号)



平成23(2011)年6月 より処ぽかぽか(現堀江ぽかぽか)開設(第75号(一部))

平成29(2017)年4月 富岡地域包括支援センター運営開始(第96号)



平成15(2003)年5月 福祉サービス利用援助事業(現日常生活自立支援事業)実施(第51号(一部))



平成18(2006)年10月 うらやす社協のキャラクター「うらちゃん」誕生(第61号(一部))



平成20(2008)年10月 うらやす成年後見・生活支援センター設置(第66号(一部))

浦安市社会福祉協議会年表

年	月	うらやす社協のあゆみ	月	浦安の出来事
明治 22 年 (1889)			4月	堀江、猫実、当代島村の3村が合併し、浦安村誕生(人口5,964人)
明治 42 年 (1909)			9月	町制を施行し、浦安町誕生(人口8,475人)
明治 44 年 (1911)			3月	浦安町役場庁舎竣工
昭和 6 年 (1917)		方面委員会(現民生委員児童委員協議会)発足		
昭和 21 年 (1946)	12月	方面委員に代わり民生委員が配置		
昭和 24 年 (1949)			8月	キティ台風が襲来。高潮により家屋が倒壊し、農漁業に甚大な被害
昭和 25 年 (1950)	5月	保護司が委嘱される		
昭和 30 年 (1955)		世帯更生資金(現生活福祉資金)貸付事業開始		
昭和 33 年 (1958)			6月	本州製紙江戸川工場の悪水放流に抗議して、同工場に押しかけた漁民と、警官隊が衝突し、漁民側に105人の重軽傷者
昭和 37 年 (1962)	9月	浦安町社会福祉協議会設立 会長：尾頭 三之助町長		漁業権の一部を放棄
昭和 39 年 (1964)				公有水面埋立事業開始
昭和 40 年 (1965)		会長：岡島 多三郎町長		
昭和 44 年 (1969)		会長：熊川 好生町長	3月	地下鉄東西線開通
			4月	海面埋立地で、浦安鉄鋼団地業務開始
			6月	人口が2万人突破
昭和 46 年 (1971)			4月	漁業権の全面放棄を決定
昭和 49 年 (1974)			5月	老人福祉センター開館
			11月	町役場新庁舎で執務開始
昭和 50 年 (1975)			1月	人口が3万人突破
昭和 51 年 (1976)			3月	独居老人住宅「第1いこい荘」が堀江に完成
昭和 54 年 (1979)	4月	福祉資金貸付事業要綱制定(貸付事業は昭和46年から開始)	5月	人口が5万人突破
昭和 55 年 (1980)			5月	人口が6万人突破

年	月	うらやす社協のあゆみ	月	浦安の出来事
昭和56年 (1981)	4月	会長：熊川 好生市長 交通遺児(等)援護基金積立金実績あり	4月	浦安市市制施行(人口65,662人)
昭和57年 (1982)	7月	社会福祉法人浦安市社会福祉協議会認可	4月	首都高速道路湾岸線開通
		会長：芝崎 雄 浦安社協だより第1号発行		
昭和58年 (1983)	4月	交通遺児等援護基金規程施行	4月	「東京ディズニーランド®」オープン
昭和59年 (1984)	4月	心配ごと相談所設置		
昭和61年 (1986)			3月	市役所第2庁舎開設
昭和62年 (1987)			5月	人口が10万人突破
昭和63年 (1988)	4月	会長：芝崎 雄・吉岡 金弥 事務所を市役所庁舎内から浦安市総合福祉センターへ移転 うらやす社協が千葉県共同募金会浦安市支会の事務局に うらやす社協が民生委員児童委員協議会の事務局に うらやす社協が保護司連絡協議会の事務局に 母子福祉センター管理委託業務開始 地域福祉センター管理委託業務開始	4月	総合福祉センター開設
			12月	JR京葉線開通新浦安駅、舞浜駅開設
平成元年 (1989)	6月	会長：吉岡 金弥 高額療養費貸付事業要綱制定	5月	浦安誕生100周年記念式典、イベント開催
平成2年 (1990)	4月	小地域福祉圏地域ぐるみ福祉ネットワーク事業推進委員会設置 ※支部社協の前身	3月	JR京葉線が全線開通
	7月	食事サービス(社協事業として)開始 ※これまではボランティア会で実施		
平成6年 (1994)	8月	自動販売機設置運営設置事業開始		
平成7年 (1995)		会長：吉岡 金弥・大塚 満子		
平成8年 (1996)	4月	会長：大塚 満子・三宅 利正 ボランティアセンター開設		
平成9年 (1997)		会長：三宅 利正		
平成12年 (2000)	4月	会長：三宅 利正・杉本 誠三 高額介護サービス費等貸付事業開始		

年	月	うらやす社協のあゆみ	月	浦安の出来事
平成13年 (2001)	5月	会長：杉本 誠三 支部社会福祉協議会事業開始	9月	「東京ディズニーシー®」オープン
平成14年 (2002)	1月	ファミリー・サポート・センター事業開始		
	4月	スロープ付軽自動車貸出事業開始		
平成15年 (2003)	4月	リフト付きワゴン車「ゆうあい号」貸出事業開始～平成21年3月	11月	福祉センターオープン
	5月	福祉サービス利用援助事業(現日常生活自立支援事業)実施		
平成16年 (2004)		会長：杉本 誠三・梅原 祥子	8月	人口が15万人突破
			11月	浦安駅前高齢者デイサービスセンターオープン
平成17年 (2005)		会長：梅原 祥子		
平成18年 (2006)	4月	法人後見事業要綱制定	3月	特別養護老人ホーム、介護老人保健施設竣工
	10月	うらやす社協のキャラクター「うらちゃん」誕生		
平成20年 (2008)	4月	会長：梅原 祥子・宇田川 敬之助 成年後見・生活支援センター設置		
平成21年 (2009)		会長：宇田川 敬之助		
	4月	リフト付き大型バス「スマイル号」及び貸出事業開始		
	7月	老人福祉センター運営開始		
	10月	法人後見受任		
平成22年 (2010)	4月	東野小学校地区児童育成クラブ事業開始		
	7月	エスレ高洲支部社会福祉協議会事務所設置(現高洲ぽっかぽか)		
平成23年 (2011)	3月	軽貨物車両貸出事業開始	3月	東日本大震災の影響で広範囲にわたり液状化が発生し、甚大な被害
	6月	より処ぽっかぽか(現堀江ぽっかぽか)開設		
平成24年 (2012)	10月	会長：宇田川 敬之助・宇田川 精一 大型バス「きずな号」貸出事業開始		
平成25年 (2013)		会長：宇田川 精一		
	6月	堀江つどいの広場開設		
	10月	常設型災害ボランティアセンター開設		
平成26年 (2014)		会長：大塚 久美子		
	10月	市民後見推進事業開始(市民後見人の養成)		
	10月	うらちゃんサロン望海(子育てサロン)開設		

年	月	うらやす社協のあゆみ	月	浦安の出来事
平成27年 (2015)	7月	放課後異年齢児交流促進事業開始(夏休み期間中のみの受託)		
	9月	うらちゃんサロン北栄開設		
平成28年 (2016)	4月	生活支援・介護予防体制整備事業開始 生活支援コーディネーターの配置	6月	市役所新庁舎竣工
	4月	富岡小学校地区児童育成クラブ事業開始		
	6月	富岡ぼっかばか開設		
	7月	うらちゃんサロン猫実開設		
平成29年 (2017)	4月	富岡地域包括支援センター運営開始		
	7月	初の市民後見人誕生		
	9月	放課後異年齢児交流促進事業通年事業となる「東野うらちゃんひろば」開設		
平成30年 (2018)	2月	浦安市社会福祉協議会設立55周年・社会福祉法人35周年記念式典開催		
	4月	うらやす社協だより第100号発行		
	4月	富岡地域包括支援センター東野支所運営開始		

社会福祉協議会歴代会長

氏 名	在 任 期 間		
尾頭 三之助	昭和37年 9月 1日	～	昭和40年 9月 7日
岡島 多三郎	昭和40年 9月 8日	～	昭和44年 9月 7日
熊川 好生	昭和44年 9月 8日	～	昭和57年 7月19日
芝崎 雄	昭和57年 7月20日	～	昭和63年 9月 1日
吉岡 金弥	昭和63年 9月 2日	～	平成 7年12月21日
大塚 満子	平成 7年12月22日	～	平成 8年 9月 1日
三宅 利正	平成 8年 9月 2日	～	平成12年 9月 1日
杉本 誠三	平成12年 9月 2日	～	平成16年 9月 1日
梅原 祥子	平成16年 9月 2日	～	平成20年 9月 1日
宇田川 敬之助	平成20年 9月 2日	～	平成24年 9月 2日
宇田川 精一	平成24年 9月 3日	～	平成26年 3月31日
大塚 久美子	平成26年 4月 1日	～	現在

社会福祉法人 浦安市社会福祉協議会 職員（平成29年度）

会 長	大塚 久美子			
副会長	中澤 潤	渡邊 武		
常務理事（常勤職）	鶴見 仲寛	金子 昇（再任用）		
事務局長	杉山 正毅			
次 長	齊藤 正伸			
プロパー職員	石田 眞佐雄	大塚 春代	牧野 剛	
	浅野 伸生	若月 宏治	田中 美緒	
	安田 知絵	佐久間 大輔	峰 龍信	
	鈴木 重則	大西 美和		
老人福祉センター	長峰 敏幸（再任用）	樽林 元樹	上木 賢人	
富岡地域包括支援センター	河野 由紀子	秋庭 美智代	伊藤 聖子	
	阿部 裕子	鈴木 佑三子		
非常勤職員	86 人			



平成30年3月30日撮影

社会福祉法人 浦安市社会福祉協議会 記念誌

発 行 平成30年8月

編集・発行 社会福祉法人 浦安市社会福祉協議会
〒279-0042 千葉県浦安市東野1-7-1総合福祉センター内
TEL:047-355-5271 FAX:047-355-5277
<http://urayasushi-shakyo.jp/>

印 刷 株式会社エリート情報社

手をつなごう・こころの輪



浦安市社会福祉協議会